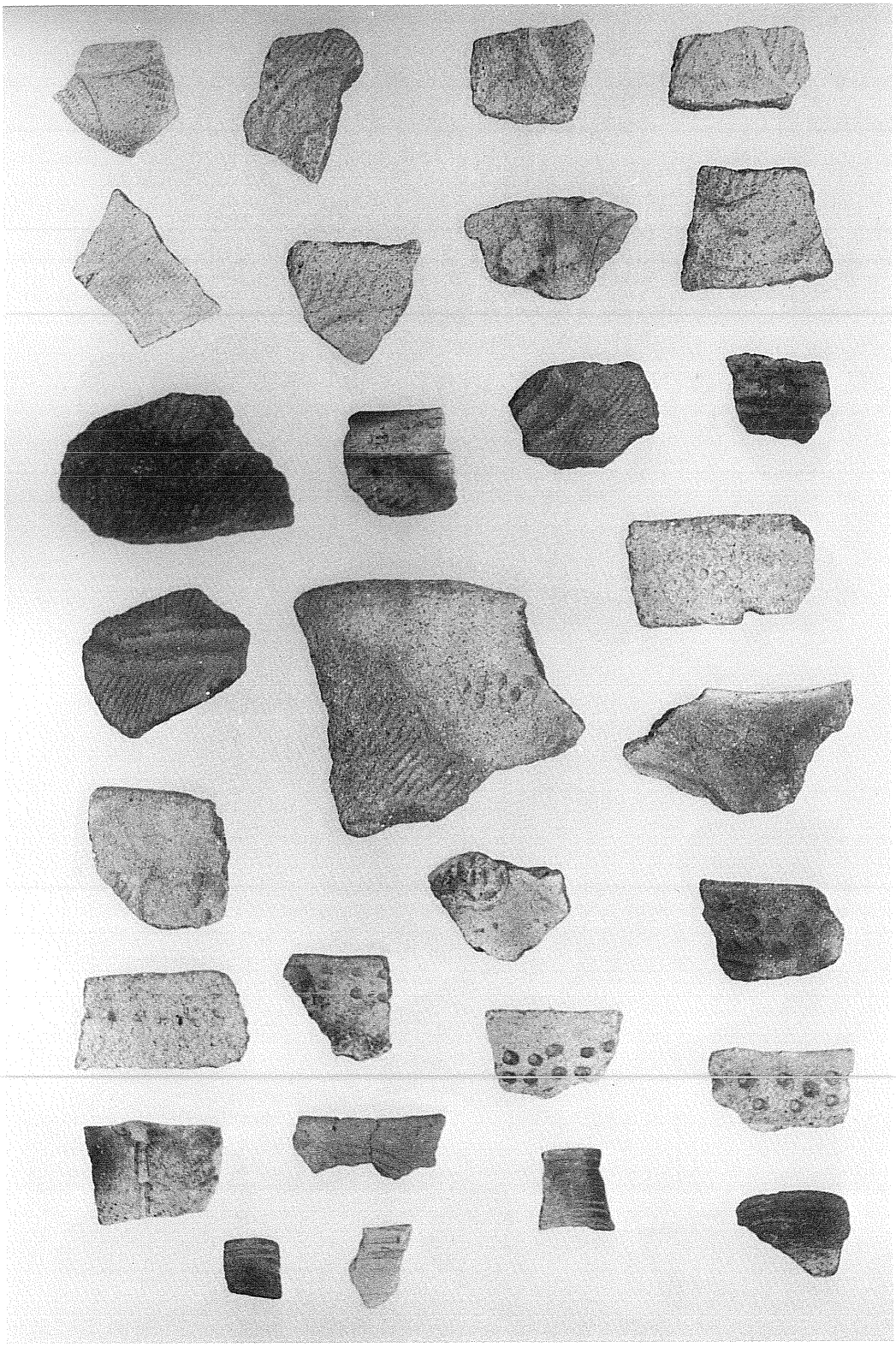
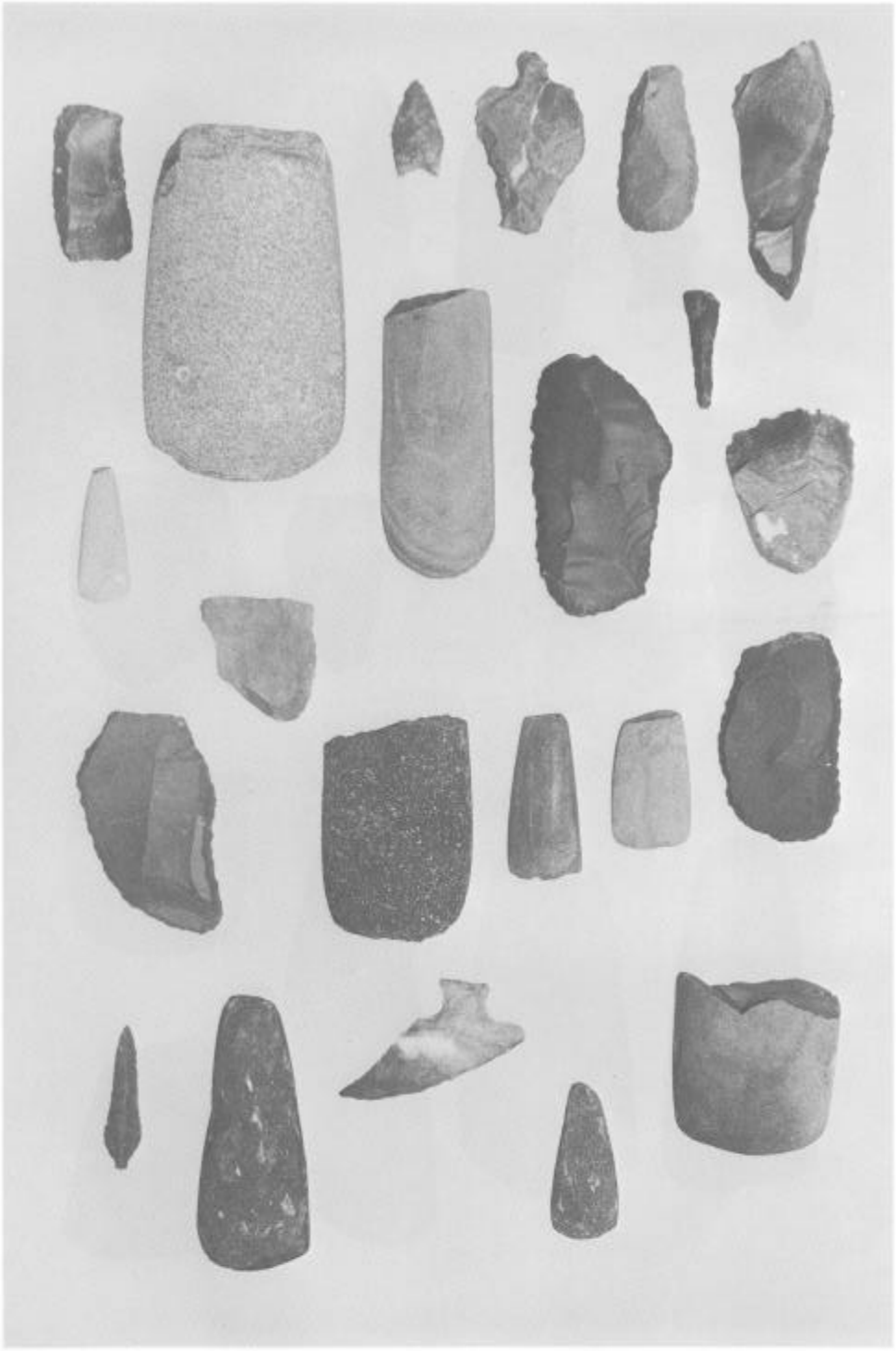
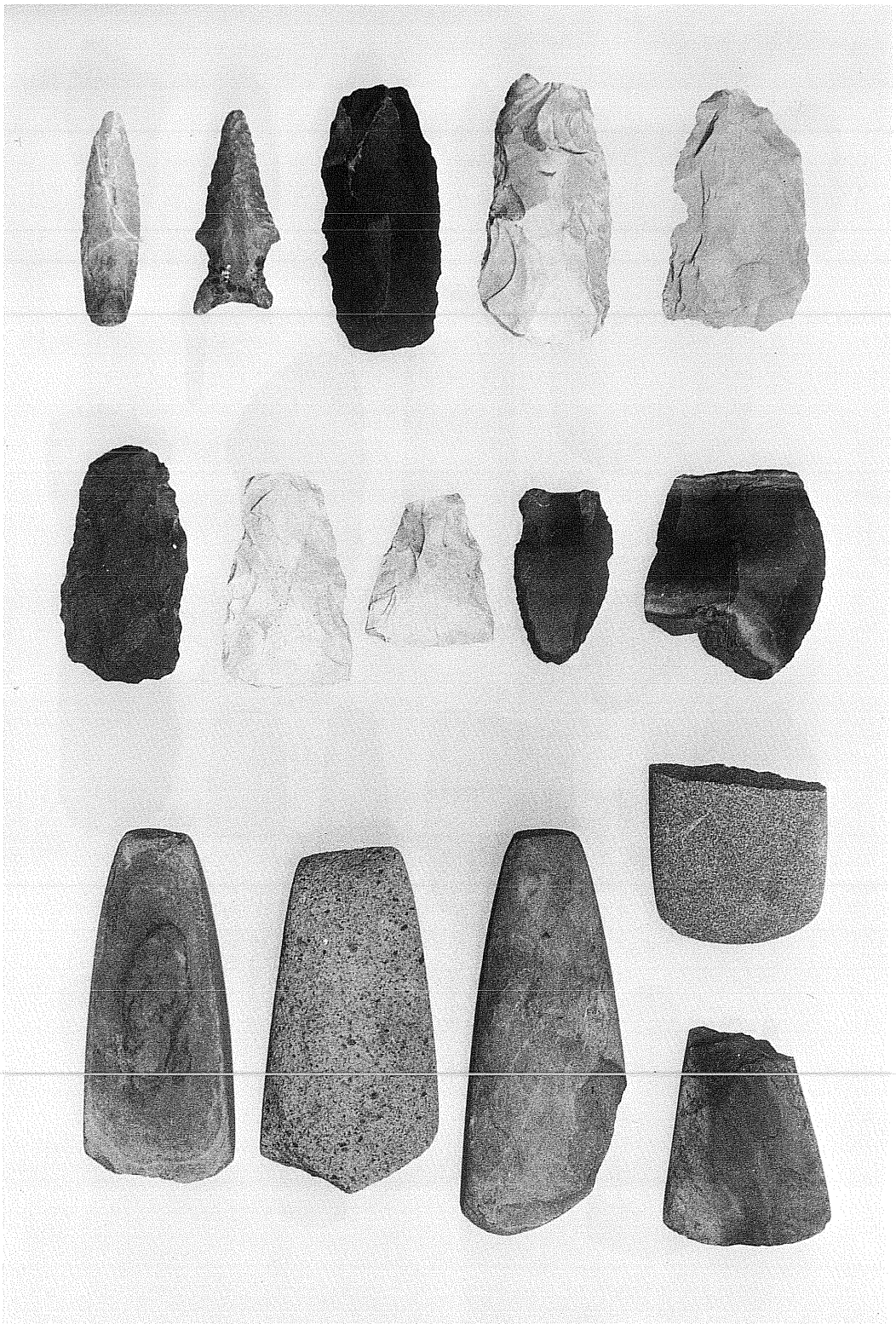


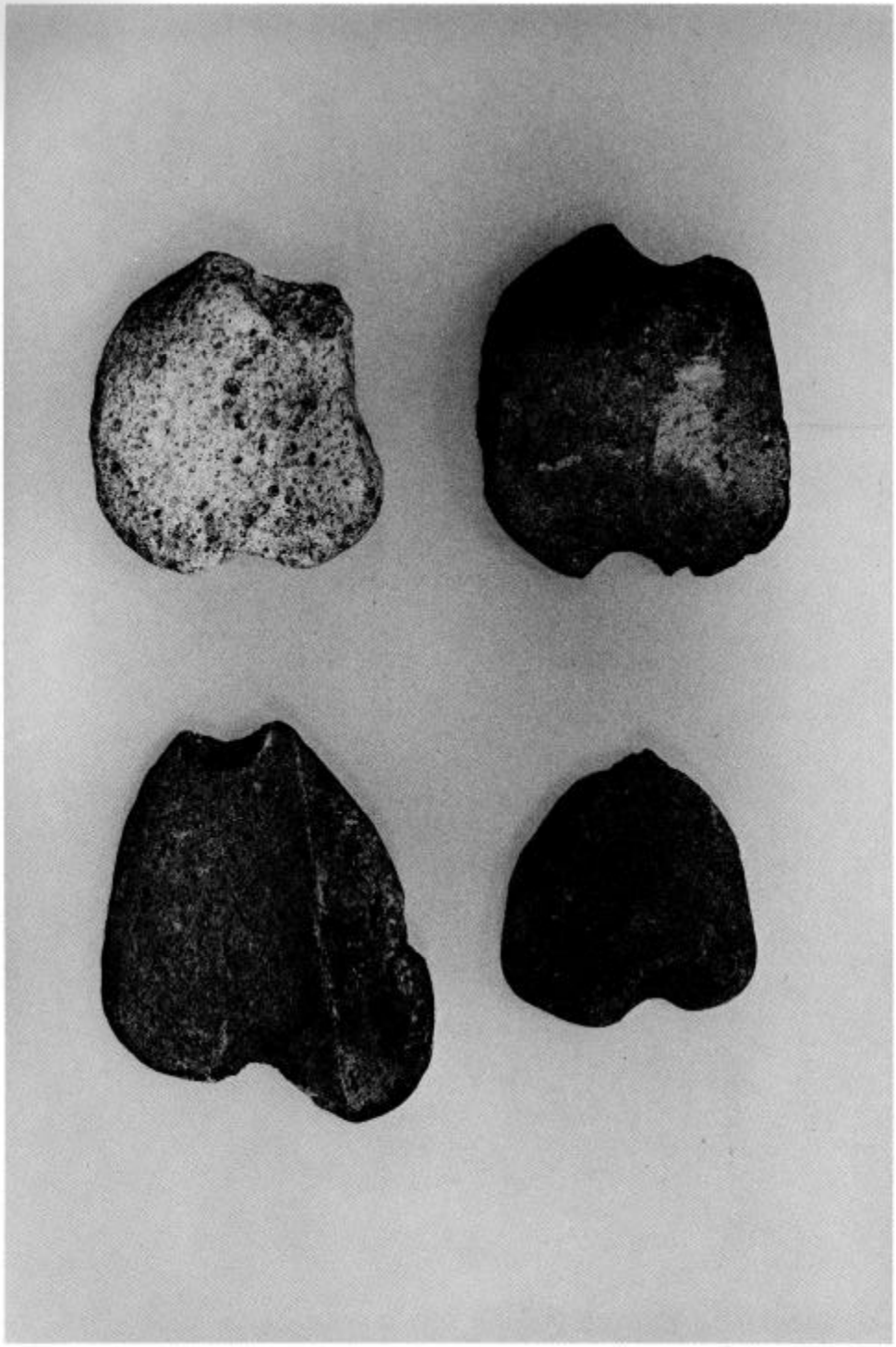
図版28　遺構外出土土器



図版29　遺構内出土石器

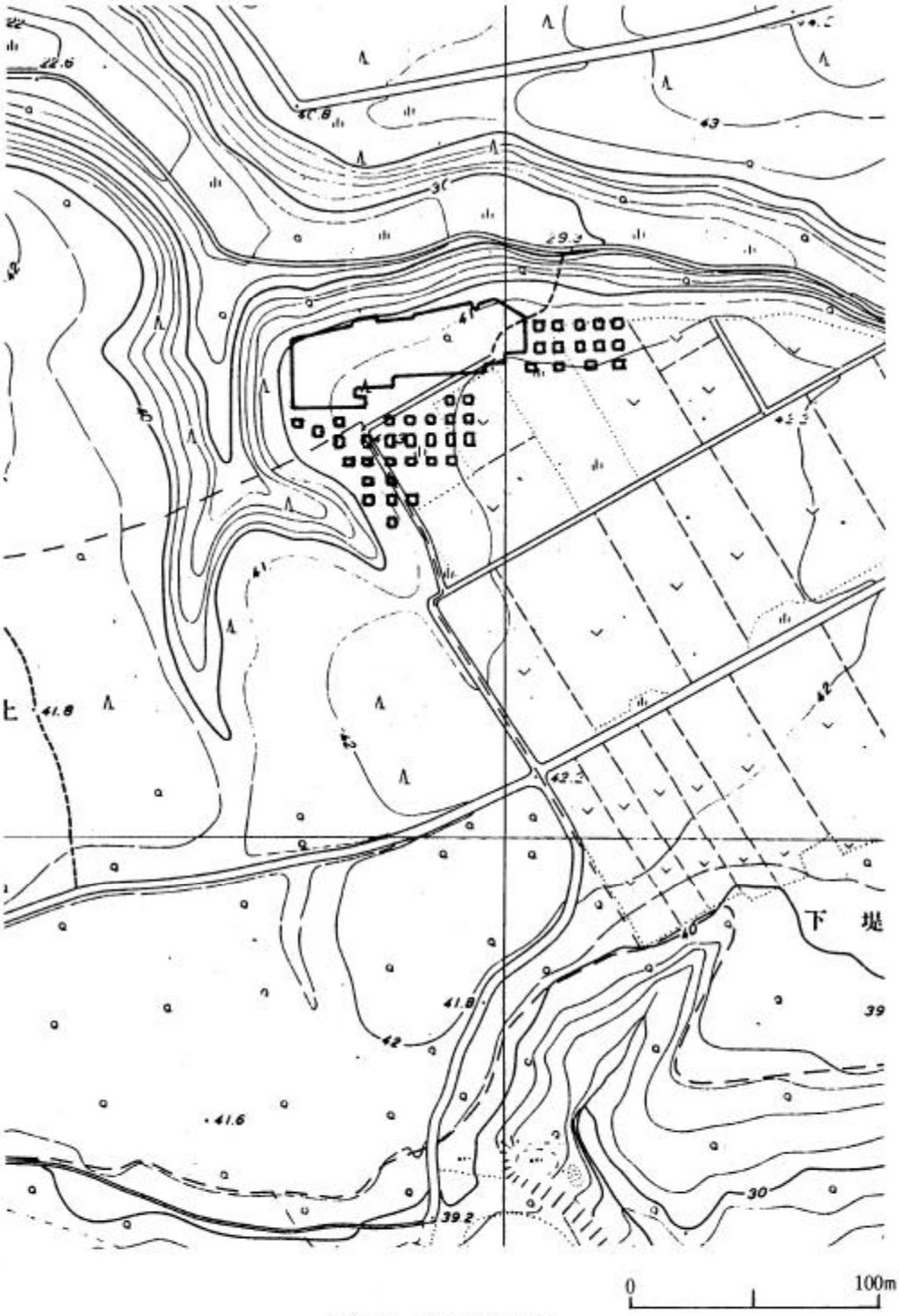


図版30　遺構外出土石器

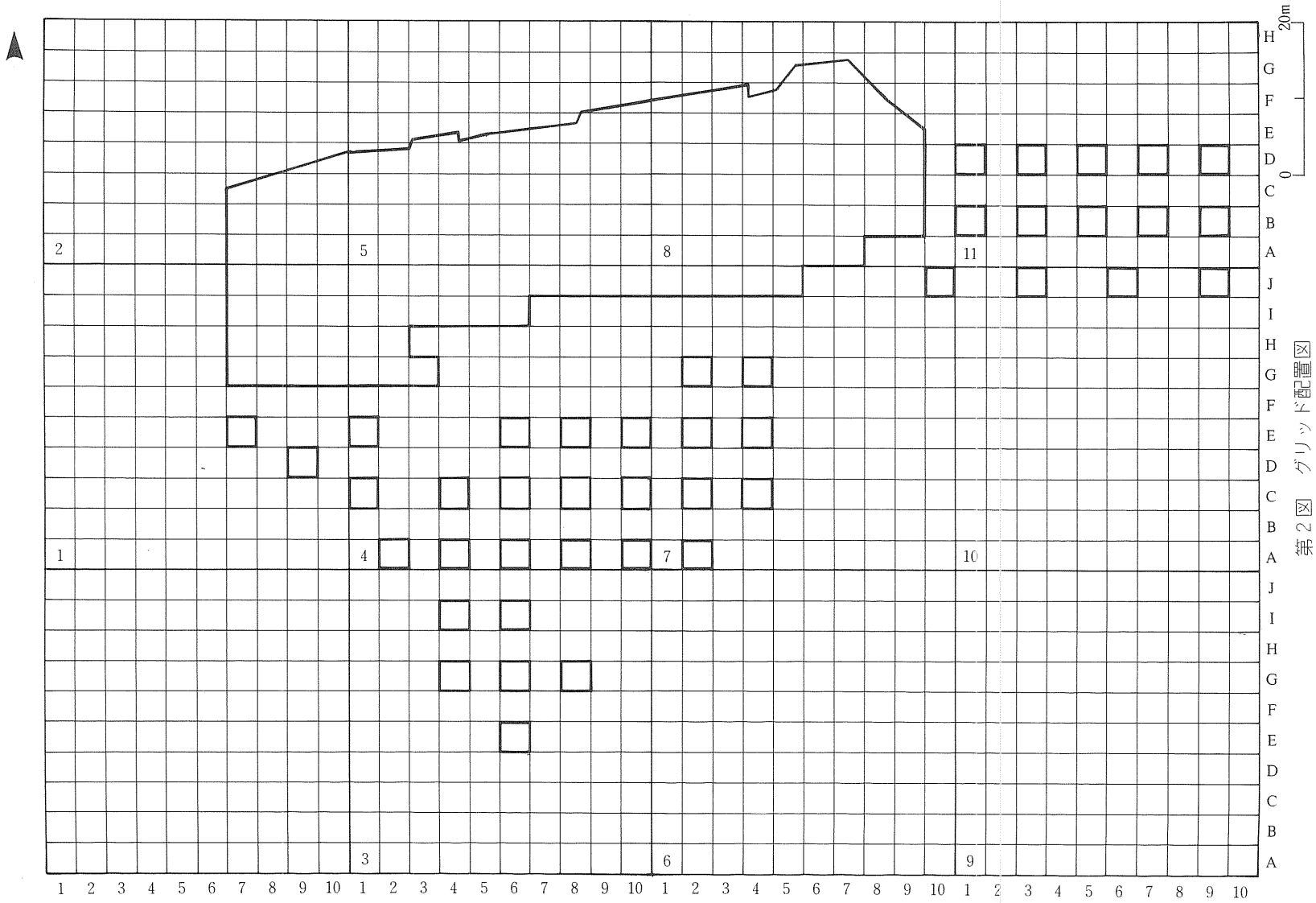


図版31　遺構外出土石器

下堤F遺跡



第１図　遺跡周辺の地形



第2図　グリッド配置図

遺跡の概観

標高約41mの台地上に位置し、北側は大きな沢となっている。

遺跡は縄文時代前期末葉から晩期にかけてのもので、竪穴住居跡19軒、土坑18基が検出された。

縄文時代前期末葉から晩期の遺跡は、南東約300mに下堤G遺跡、東約350mに下堤E遺跡、西約700mに坂ノ上E・F遺跡などがある。

遺構と遺物

1号住居跡（第3図）

調査区南西部で検出された。

プランは長軸5m、短軸3mの小判形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは12個検出され、主柱穴は6個と考えられる。炉は地床炉で、2基検出された。火熱を受けて赤変しているが比較的弱い。床はほぼ平坦で堅い。

出土遺物

土器（第31図29～35）

全て覆土出土である。細い粘土紐を直線、円形、鋸歯状に貼り付け、半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。35は連続爪形文を施さない。

石器（第40図1～5）

1は横型石匙、2・3は掻器、4・5は削器である。

2号住居跡（第4図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸3.2m、短軸2.9mの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出され、主柱穴は4～5個と考えられる。炉は石囲土器埋設部、石組部からなる。石囲土器埋設部は深鉢形土器の下半部を埋設し、周辺は火熱を受け赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第26図1、第31図36～38）

1は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。1は深鉢形土器の下半分で、地文はLR単節斜縄文（縦位回転）である。37は刺突を加飾する。

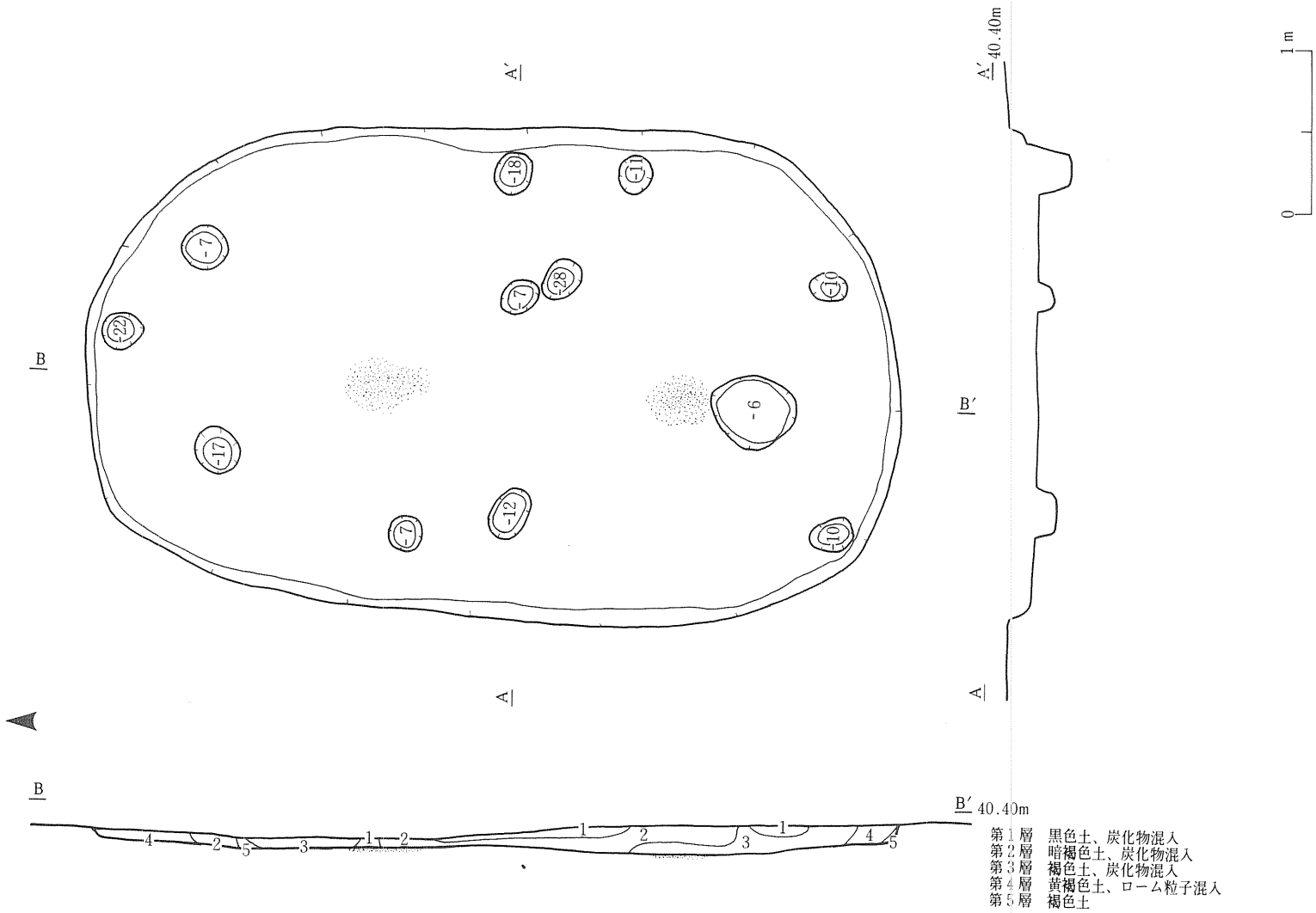
石器（第40図6）

6は縦型石匙である。

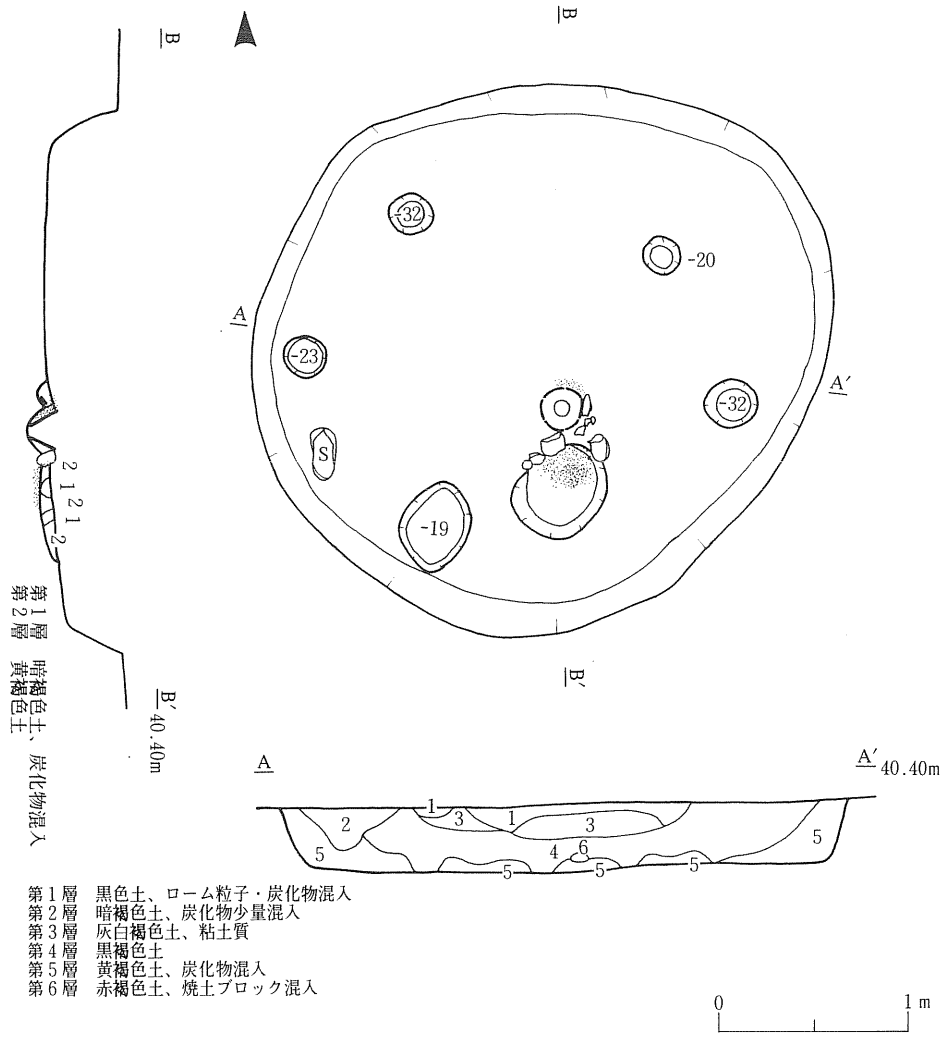
3号住居跡（第5図）

調査区西側で検出された。

プランは径5mの円形を呈し、13号土坑によって切られている。確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは8個検出され、主柱穴は4～5個と考えられる。炉は土器埋設


A′
A
B
B′
40.40m
-18
-11
-7
-28
-7
-10
-22
-6
-17
-12
-7
-10
1
2
3
4
5
0
1 m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、炭化物混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子混入
第5層　褐色土

第3図　1号住居跡



第４図　２号住居跡

部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁に接する。床は平坦で、堅い。

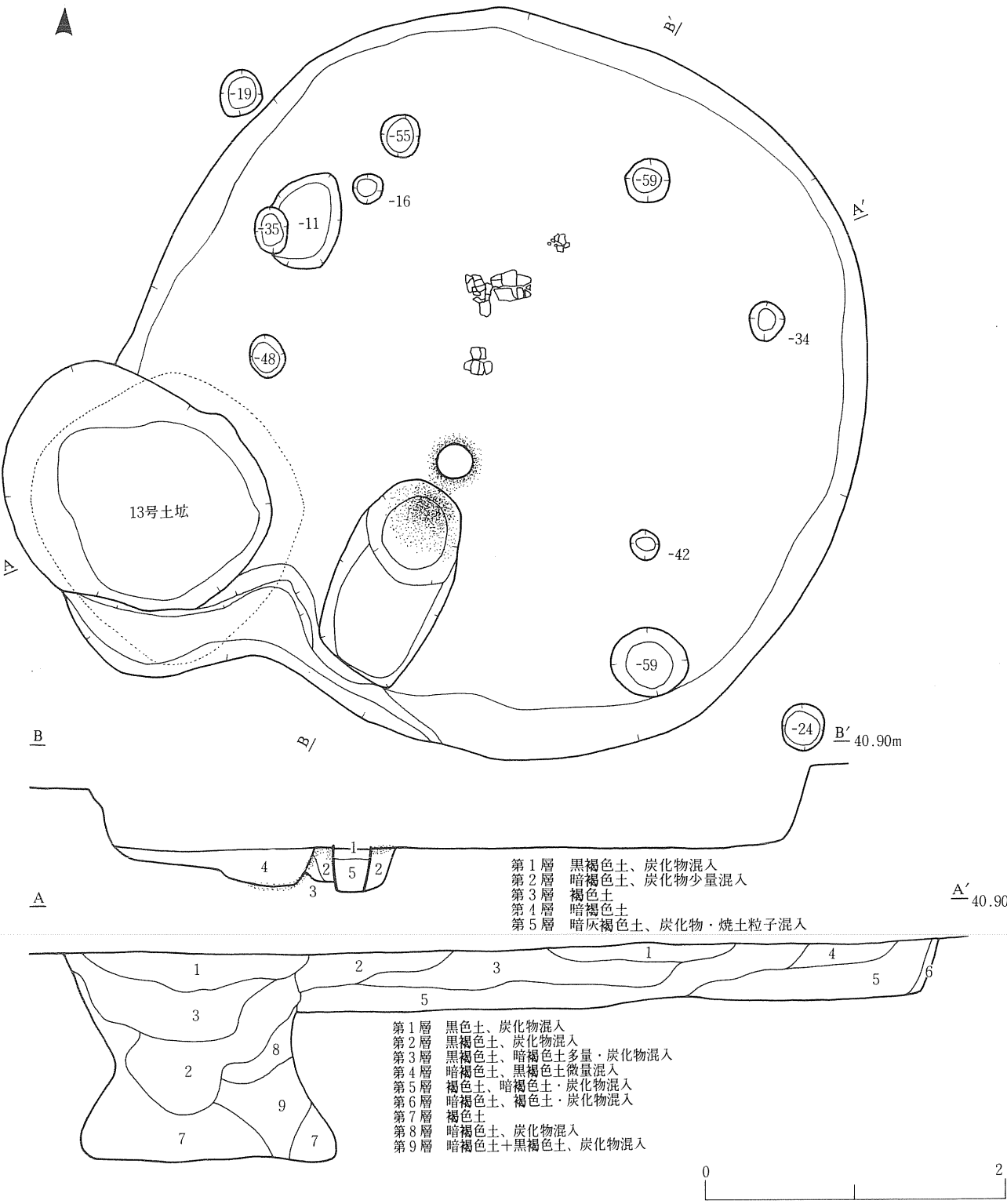
出土遺物

土器（第26図２～５、第31図39～45）

２は炉埋設土器、３～５はピット、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。２・３は深鉢形土器で、地文は２がＲＬＲ複節斜縄文（縦位回転）である。４・５は口縁部が外反する深鉢形土器で、磨消帯は横位方向へ展開し、４の磨消帯には地文が残っている部分もある。

石器（第40図７～11）

７～11は削器である。



第5図　3号住居跡、13号土坑

4号住居跡（第6図）

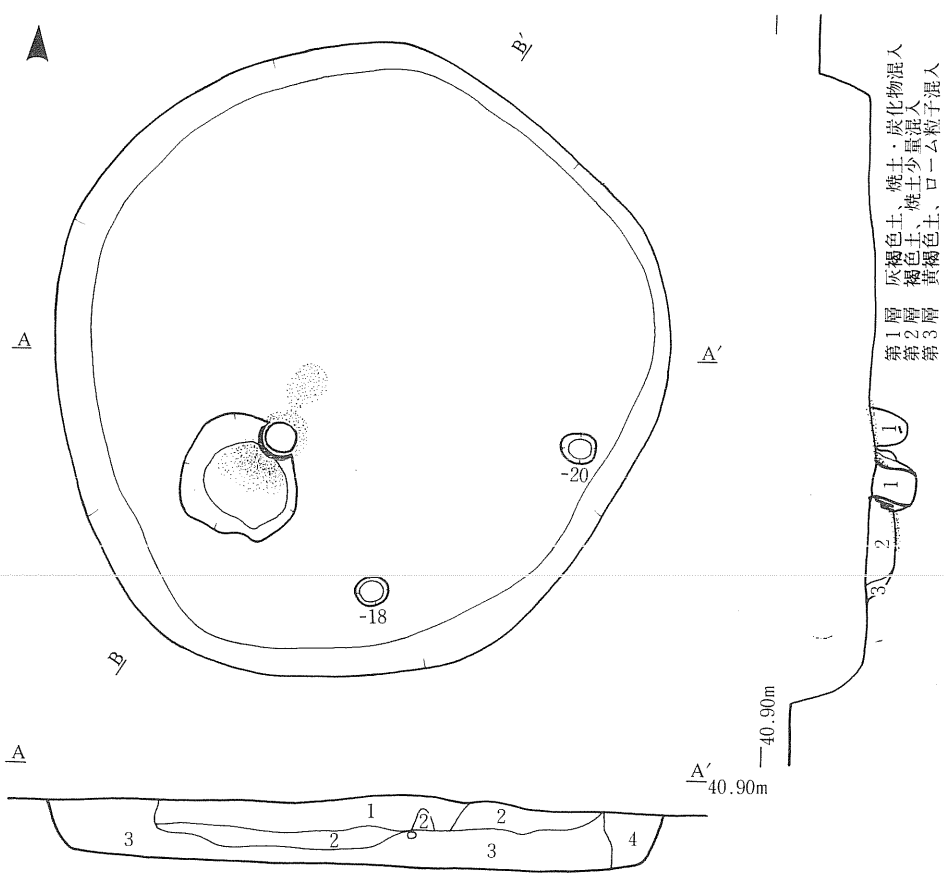
調査区西側で検出された。

プランは長軸3.4m、短軸3.2mの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2個のみの検出である。炉は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は作り替えが認められる。深鉢形土器を3重（中、外側が接合）に、若干斜位に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第26・27図6～8、第32図46～57）

6（3重の内側）・7（3重の中、外側が接合）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。6は口縁部が外反する深鉢形土器で、地文はRL単節斜縄文（縦位回転）である。7は深鉢形土器で、地文は前々段多条と考えられる。8は口縁部がやや外反する深鉢形土器である。口縁部内部に4個の突起がみられ、地文はRL単節斜縄文（縦位回転）である。57は口縁部が「く」の字状に内屈する鉢形土器である。



第6図　4号住居跡

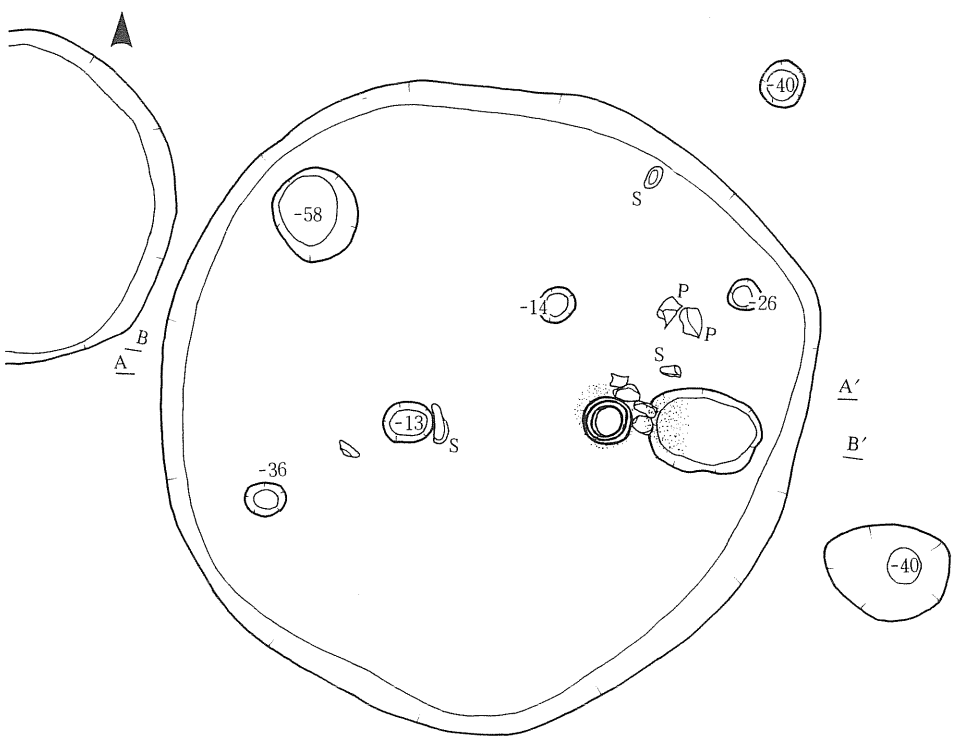
5号住居跡（第7図）

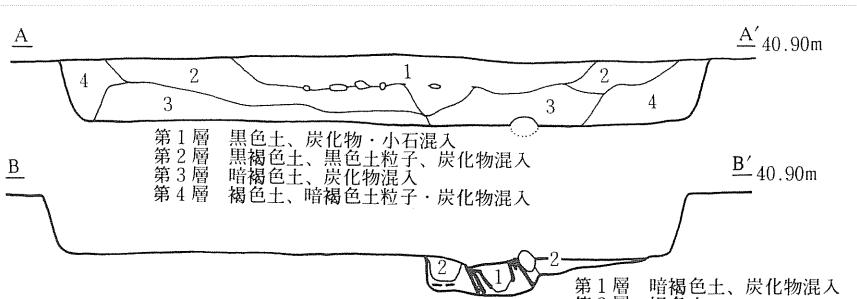
調査区南側で検出された。

プランは長軸3.5m、短軸3.4mの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは5個検出されたが、規則的ではない。炉は石囲土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は作り替えが認められ、深鉢形土器の胴部を3重（異体土器）に埋設している。周辺は火熱を受け赤変している。石組み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第27図9～11、第32図58～67）





第7図　5号住居跡

9（3重の内側）・10（3重の中）・11（3重の外側）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもの、葉脈状文を施すものである。9は深鉢形土器の下半分で、胴部中程に沈線が確認できる。地文はＬｒ無節斜縄文（縦位回転）である。10は口縁部がゆるく外反する深鉢形土器で、口唇部に突起がみられる。磨消帯に規則性はみられず、地文はＬｒ無節斜縄文（縦位回転）である。11は口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、地文はＲＬ原体による羽状縄文である。62は刻線による葉脈状の文様を施す。

6号住居跡（第8図）

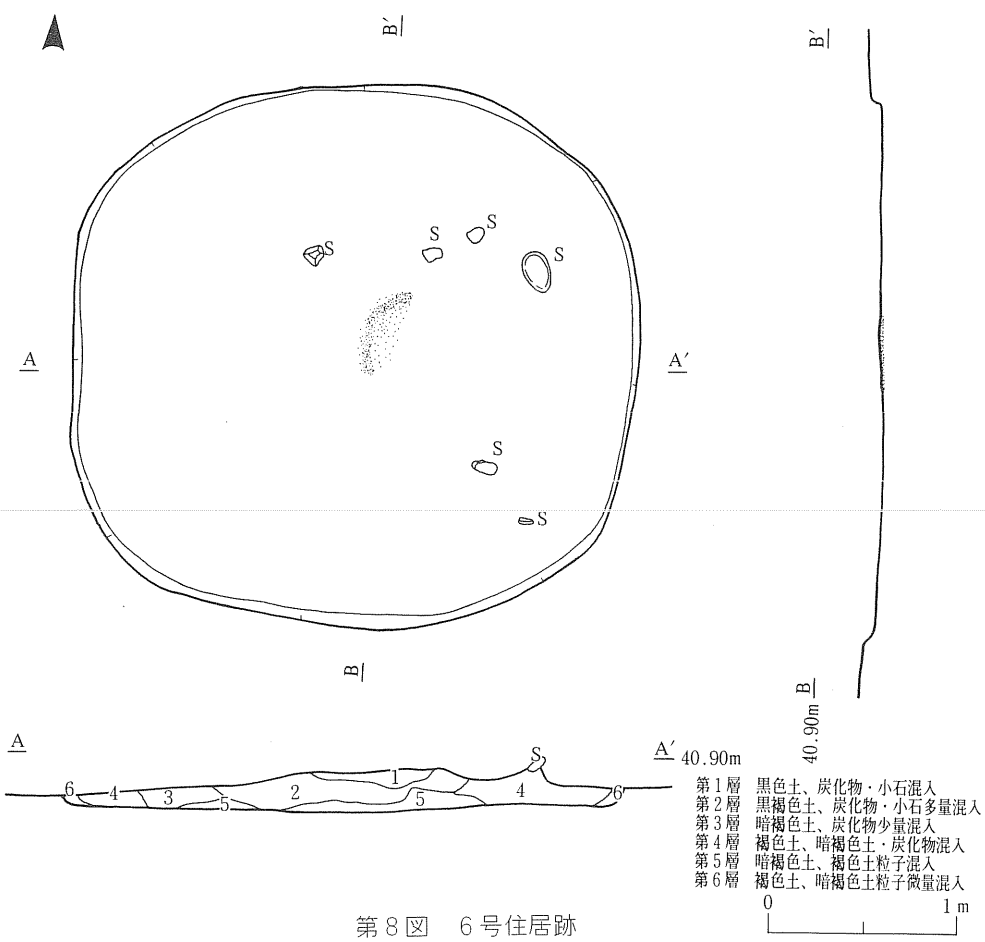
調査区西側で検出された。

プランは長軸3ｍ、短軸2.8ｍの隅丸方形を呈し、確認面からの深さは10cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は地床炉で、火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第33図68～72）

全て覆土からの出土である。68・69は沈線区画の磨消帯を有する。



第8図　6号住居跡

土製品（第39図１）

１は再利用土製品（円盤状土製品）である。

７号住居跡（第９図）

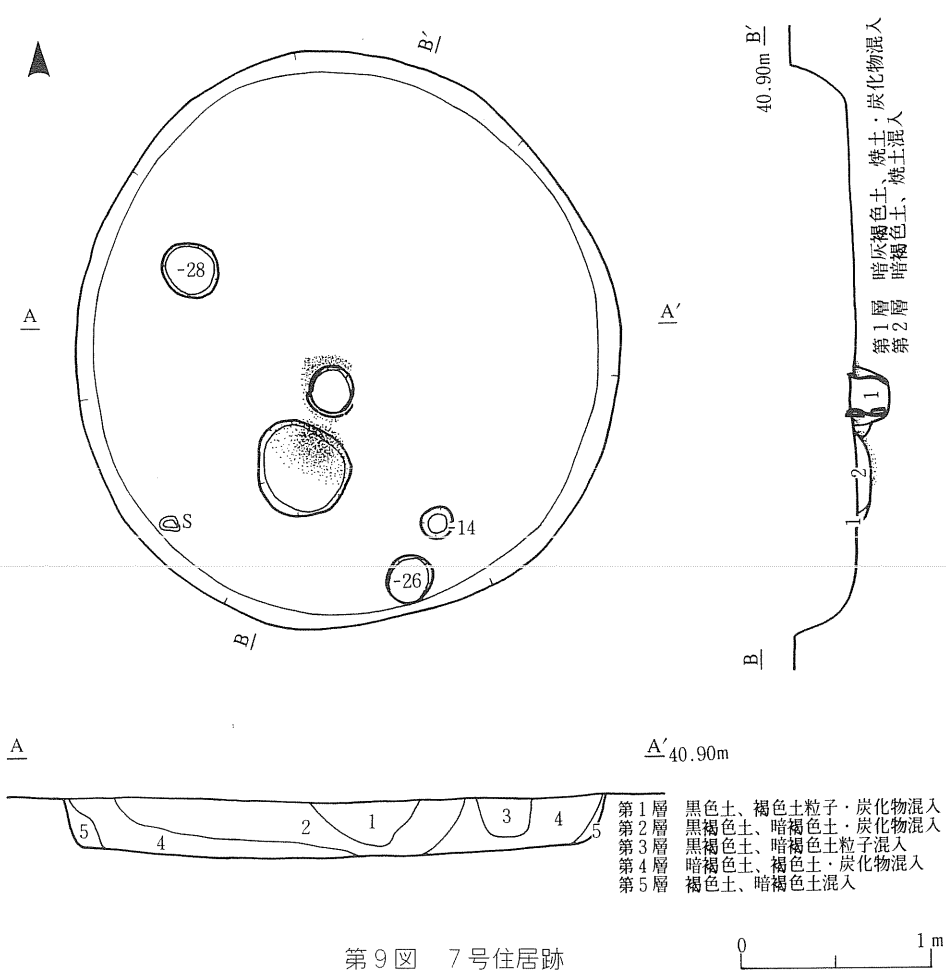
調査区西側で検出された。

プランは径３ｍの円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個のみの検出で、規則的でない。炉は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器（掘り込み部側に異なる土器を２重に埋設）を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第27図12、第33図73～76）

12は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。12は口縁部が外反する深鉢形土器で、「Ｏ」字状の磨消帯を有する。地文はＲＬ単節斜縄文（横位回転）である。



第９図　７号住居跡

石器（第40図12、第41図24）

12は掻器、24は石皿状石器である。

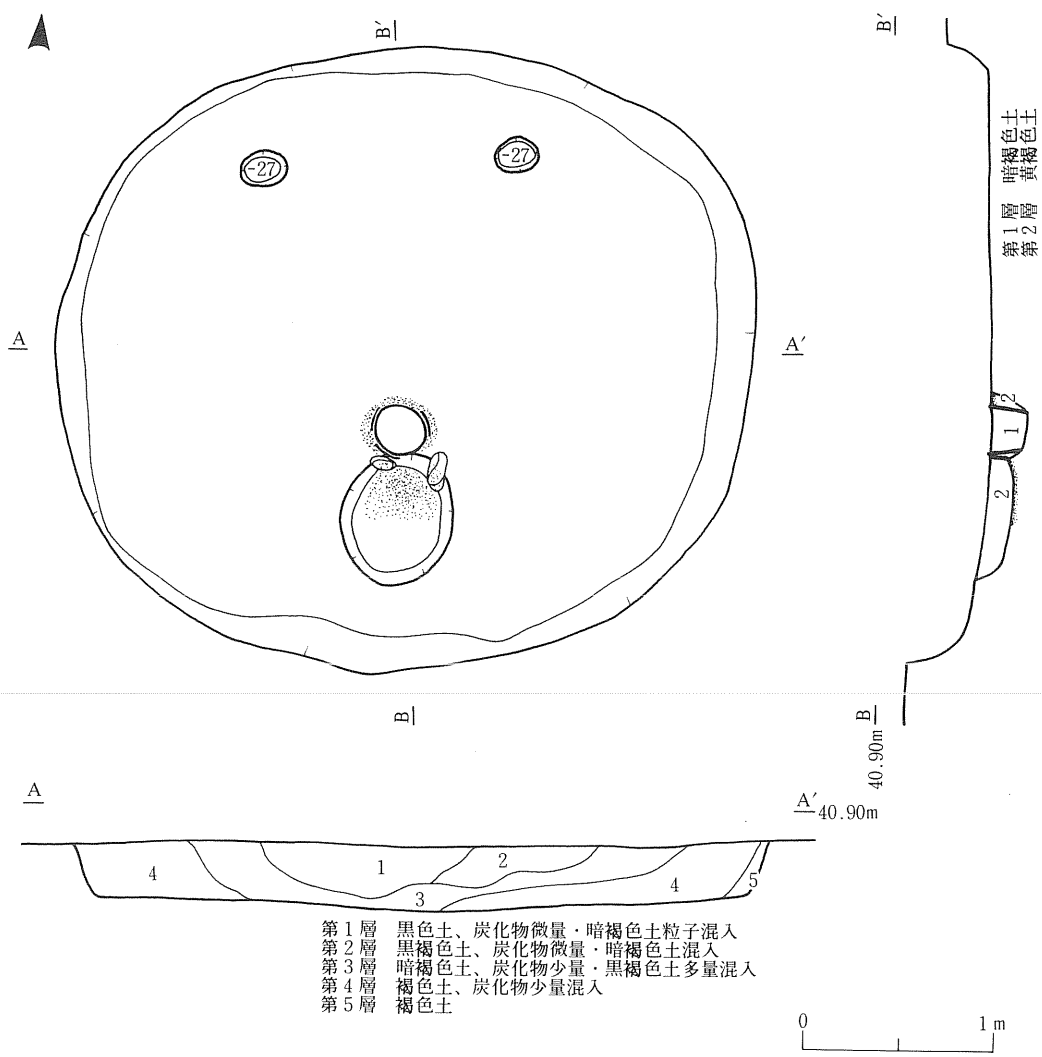
8号住居跡（第10図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

プランは径3.5ｍの円形を呈し、確認面からの深さは30cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは2個のみの検出である。炉は土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を2～3重に埋設し、周辺が火熱を受け赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けており側面の石が抜き取られた可能性がある。床はほぼ平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第28図13～16、第33図77～84）



第10図　8号住居跡

13は炉埋設土器、14は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。13は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。14は胴部が「く」の字状に内屈する鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。15は稜線区画の磨消帯を施す。口縁部には相対して大・小４個の孔をもった把手が付く。孔は小が横に、大が横と縦に作られている。内面には赤色顔料が塗られている。16は口縁部がほぼ直立する深鉢形土器で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

石器（第40図13）

13は掻器である。

９号住居跡（第11図）

調査区西側で検出された。

プランは長軸3.9m、短軸3.7mの楕円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは７個検出され、深い掘り方の４～５個が主柱穴と考えられる。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は強く火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第28図17、第33図85～90）

17は炉埋設土器、88～90は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。17は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。85には稜線がみられる。90は網目状撚糸文を施す。

石器（第40図14～16）

14は有茎石鏃、15は石錐、16は掻器である。

10号住居跡（第12図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸５ｍ、短軸4.6ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは35cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは10個検出され、主柱穴は４個である。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込みは底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁近くなる。床は平坦で堅く、部分的に焼けた痕跡がみられる。

出土遺物

土器（第29図18、第34図91～109）

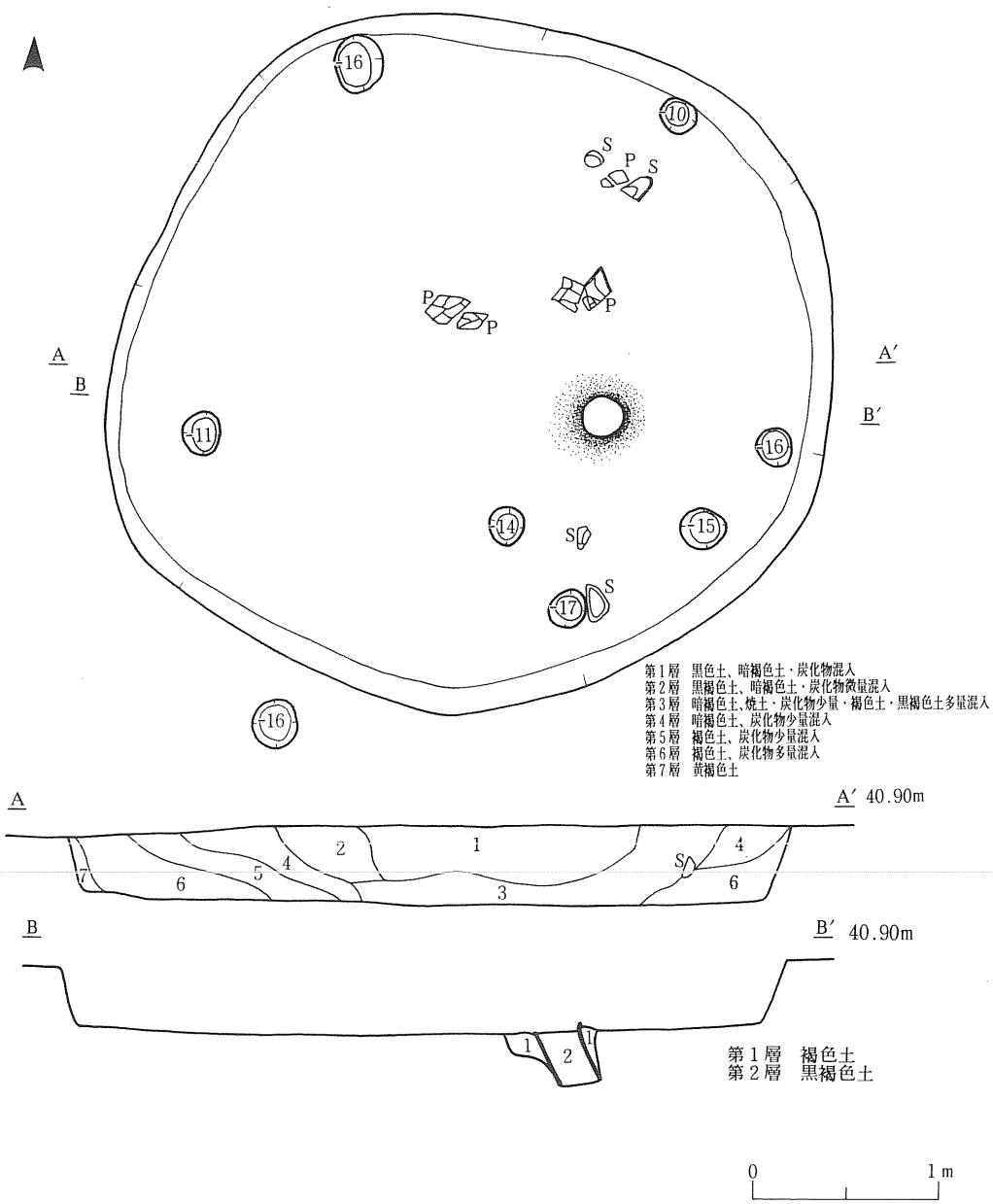
18は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。18は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。96は把手部で、18・95には刺突が加飾される。

土製品（第39図２、３）

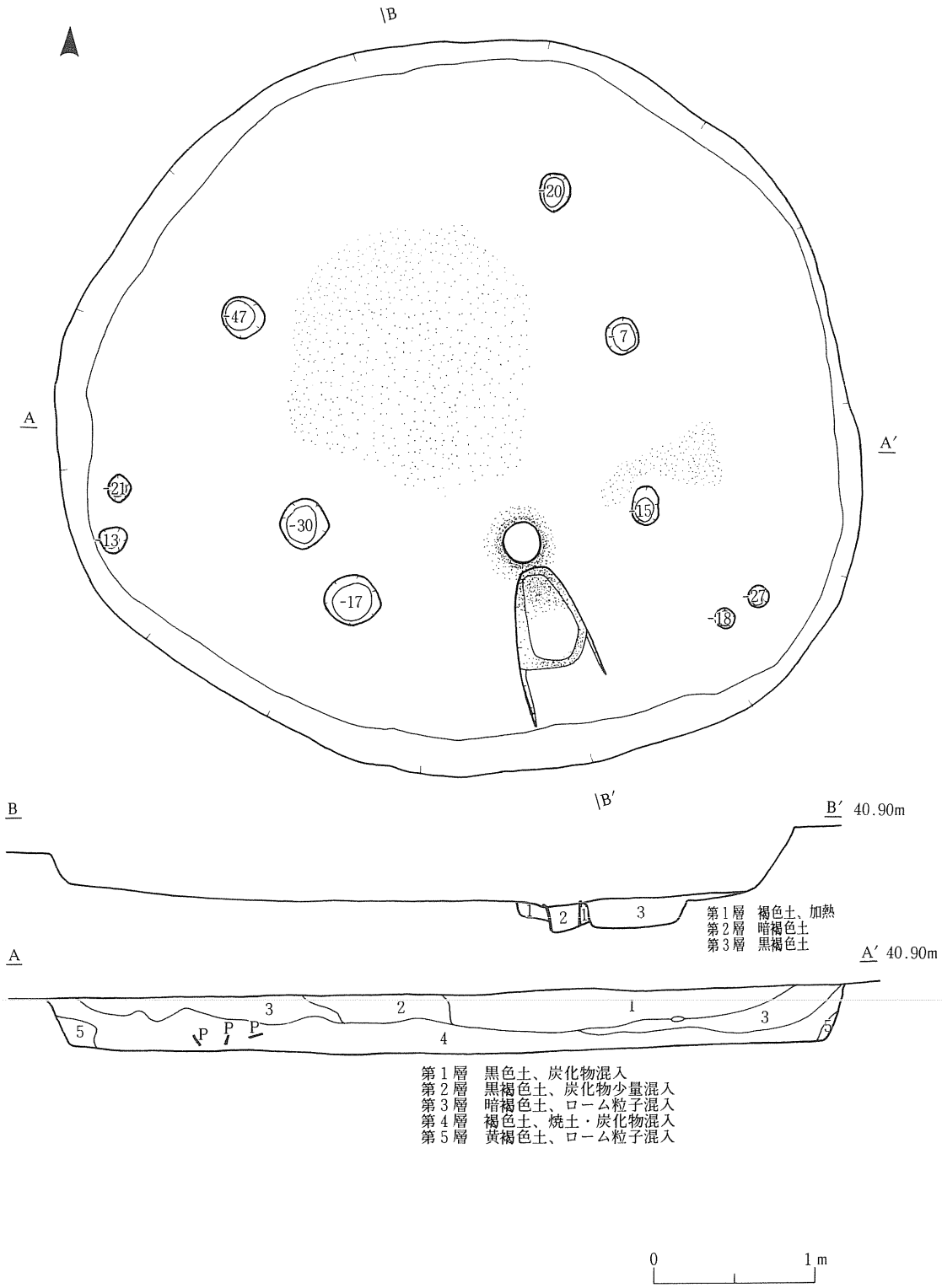
２・３は再利用土製品（円盤状土製品）である。

石器（第41図17・25・26）

17は磨製石斧、25・26は石皿である。



第11図　９号住居跡


B
A
A′
B′
B′ 40.90m
A′ 40.90m
-20
-47
-7
-21
-13
-30
-15
-17
-27
-18
1
2
3
第1層　褐色土、加熱
第2層　暗褐色土
第3層　黒褐色土
P
4
5
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物少量混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子混入
第4層　褐色土、焼土・炭化物混入
第5層　黄褐色土、ローム粒子混入
0
1m

第12図　10号住居跡

11号住居跡（第13図）

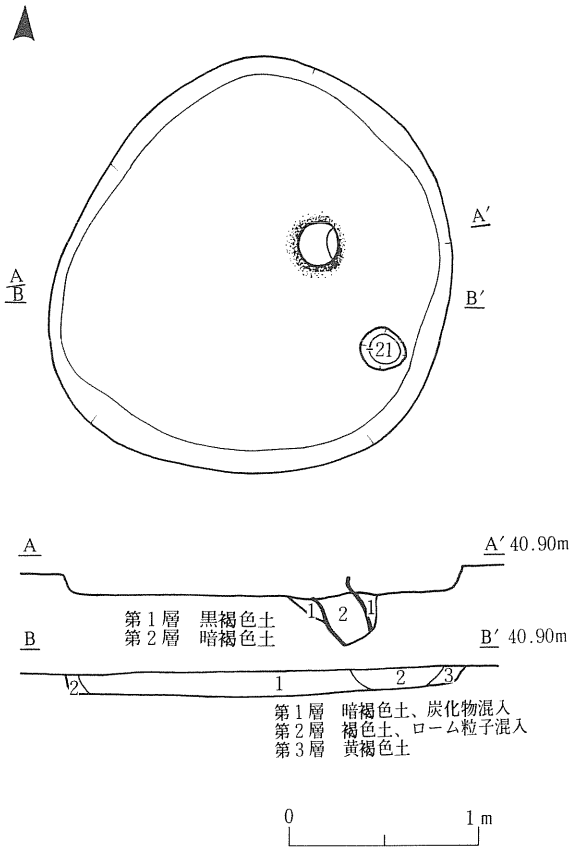
調査区南側で検出された。

プランは長軸2.2ｍ、短軸２ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは１個のみの検出である。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を斜めに埋設し周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（29図19、第35図110・111）

19は炉埋設土器、他は覆土出土である。いずれも地文のみの施文である。19は口縁部が外反する深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。



第13図　11号住居跡

12号住居跡（第14図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径2.5ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平坦で、堅い。

出土遺物

土器（第29図20・21、第35図112～114）

20は炉埋設土器、21は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。20は深鉢形土器の胴部で、「Ｏ」字状の磨消帯を有する。地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。21は口縁部が内湾する波状口縁をなす鉢形土器である。磨消帯を施した後に刻線を湾曲させて施す。

13号住居跡（第15図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径5.8ｍのほぼ円形を呈し、確認面からの深さは50cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは８個検出され、主柱穴は４個と考えられる。炉は土器埋設部、掘り込み部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。床は中央部が若干低くなる。

出土遺物

土器（第29図22、第35図115～118）

22は炉埋設土器、他は覆土出土である。口縁部に沈線を巡らし、磨消を施すものである。22は口縁部が外反する深鉢形土器で、ＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。

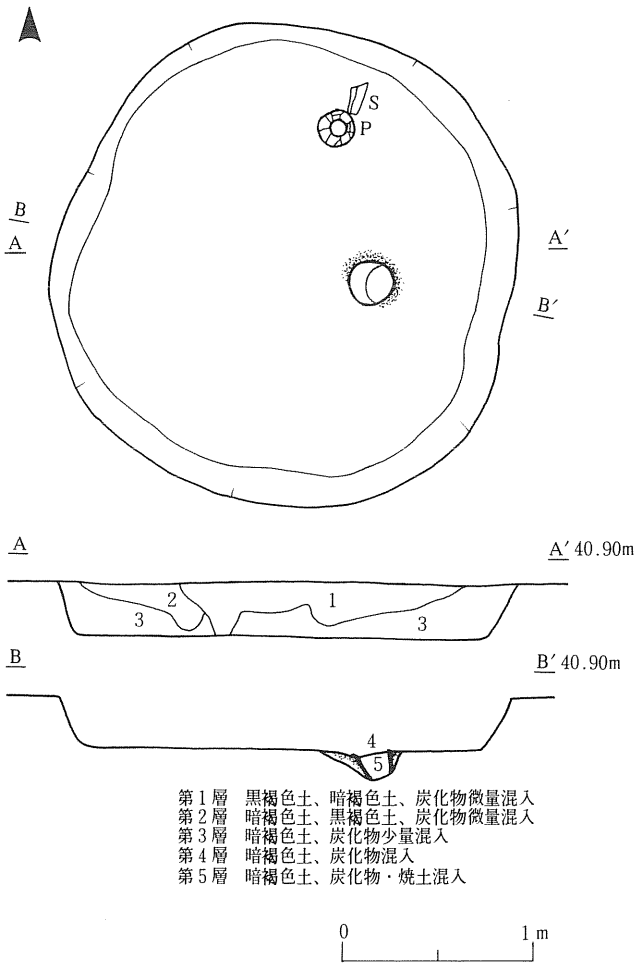
石器（第41図18・19）

18は縦型石匙、19は小形磨製石斧である。

14号住居跡（第16図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

プランは長軸３ｍ、短軸2.6ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは40cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットの検出はない。炉は土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器の胴部を２重（同一土器）に埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は底面と側面の石が火熱を受けている。床はほぼ平担で、堅い。



第14図　12号住居跡

出土遺物

土器（第29図23、第35図119～122）

23（２重の内、外側が接合）は炉埋設土器、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。23は口縁部が直立する深鉢形土器で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。

15号住居跡（第17図）

調査区北側、沢の縁辺部で検出された。

プランは径３ｍの円形を呈し、確認面からの深さは15cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個のみの検出で、規則的でない。炉は石囲土器埋設炉で、深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床は平担で、堅い。

出土土器

土器（第30図24、第35図123～126）

24は炉埋設土器、他は覆土出土である。24は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。 123は沈線区画の磨消帯で、磨消帯を画する沈線の１本に刺突を施す。

石器（第41図20）

20は無茎の石鏃である。

16号住居跡（第18図）

調査区北東部、沢の縁辺部で検出された。

プランは径４.２ｍの円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは３個のみ検出で、規則的でない。炉は土器埋設部、掘り込み部、一段浅い掘り込みからなる。土器埋設部は深鉢形土器の下半部を埋設し、周辺は火熱により赤変している。掘り込み部は底・側面が火熱を受けている。一段浅い掘り込みは壁に接する。床は若干凹凸がみられる。

出土遺物

土器（第30図25、第35・36図127～134）

25は炉埋設土器、 127は床面、他は覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するものである。25は深鉢形土器の下半分で、地文は撚糸文である。 127は口縁部内面に貼り付けによる突起がみられる。128は稜線がみられる。

石器（第41図21・22）

21・22は掻器である。

17号住居跡（第19図）

調査区東側で検出された。

プランは長軸3.1ｍ、短軸2.7ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは20cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは検出されない。炉は土器埋設炉で、深鉢形土器を若干斜めに埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。床はほぼ平坦で、中央部が特に堅くなっている。

出土遺物

土器（第30図26・27）

26は炉埋設土器、27は覆土出土である。26は深鉢形土器の胴部で、地文はＲＬ単節斜縄文（縦位回転）である。27は口縁部がやや外反する深鉢形土器である。地文である撚糸文を施し、後に、鈎状に沈線区面の磨消帯を施す。磨消帯には部分的に地文が残る。

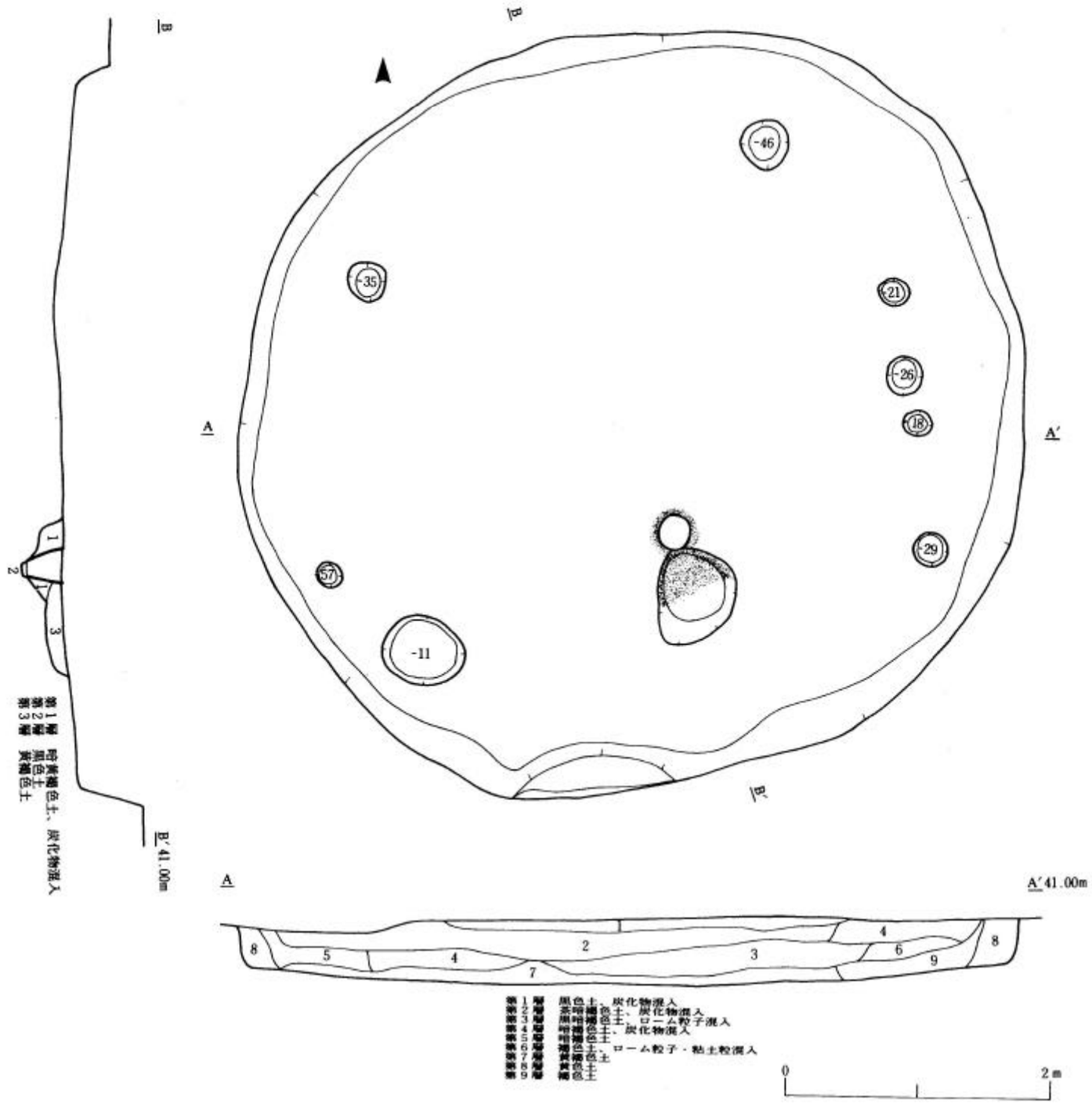
18号住居跡（第20図）

調査区北西部、沢の縁辺部で検出された。

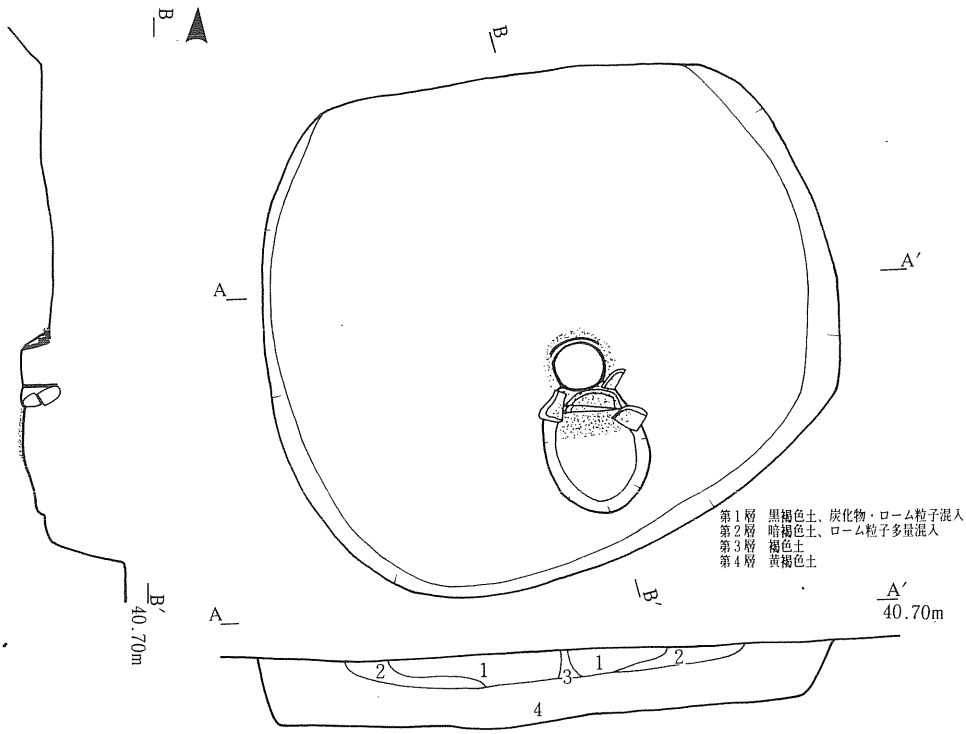
プランは径２.３ｍの円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピット、炉は検出されないが、中央部に焼けた跡が認められた。床は若干凹凸がみられた。

出土遺物

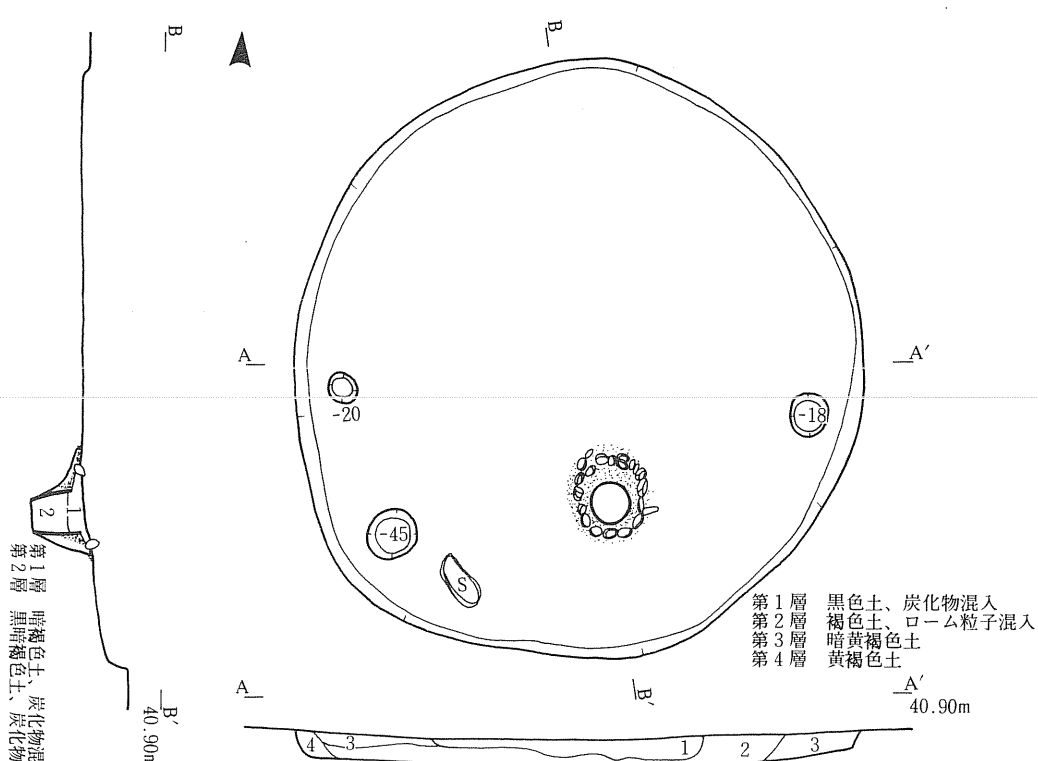
土器（第36図135・136）


B
B
A
A'
-46
-35
-21
-26
-18
-29
-57
-11
1
2
3
第1層 暗黄褐色土、炭化物混入
第2層 褐色土
第3層 黄褐色土
B'41.00m
A
A'41.00m
8
5
4
7
2
3
4
6
9
8
第1層 黒色土、炭化物混入
第2層 茶暗褐色土、炭化物混入
第3層 黒暗褐色土、ローム粒子混入
第4層 暗褐色土、炭化物混入
第5層 暗褐色土
第6層 褐色土、ローム粒子・粘土粒混入
第7層 黄褐色土
第8層 黄色土
第9層 褐色土
0
2m

第15図　13号住居跡



第16図　14号住居跡

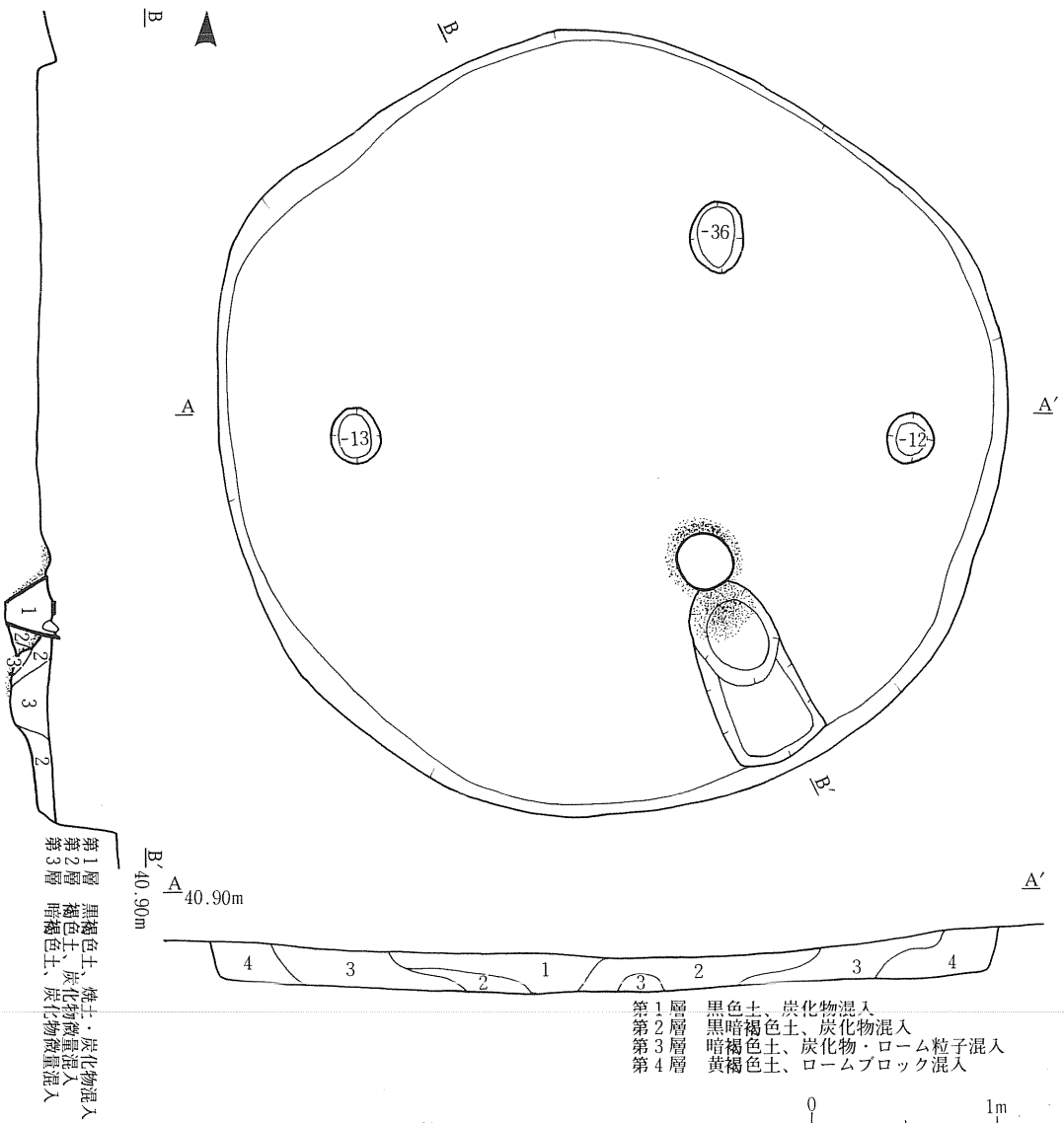


第17図　15号住居跡

いずれも覆土出土である。沈線区画の磨消帯を有するもので、136には刺突がみられる。

石器（第41図23・27）

23は削器、27は石棒の頭部である。



第18図　16号住居跡

19号住居跡（第21図）

調査区北東部、沢の縁辺部で検出された。

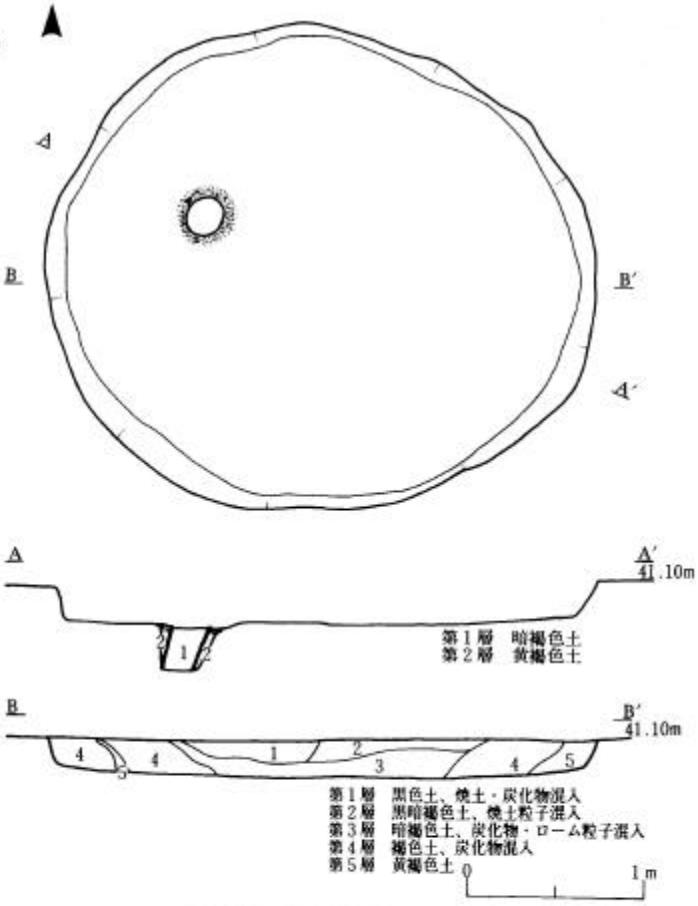
プランは長軸2.4ｍ、短軸2ｍの楕円形を呈し、確認面からの深さは25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。ピットは1個のみの検出である。炉は土器埋設部、石組部からなる。土器埋設部は深鉢形土器を埋設し、周辺は火熱を受けて赤変している。石組部は石を底面のみに組むもので、底

面の石と側面の壁が、火熱を受けている。

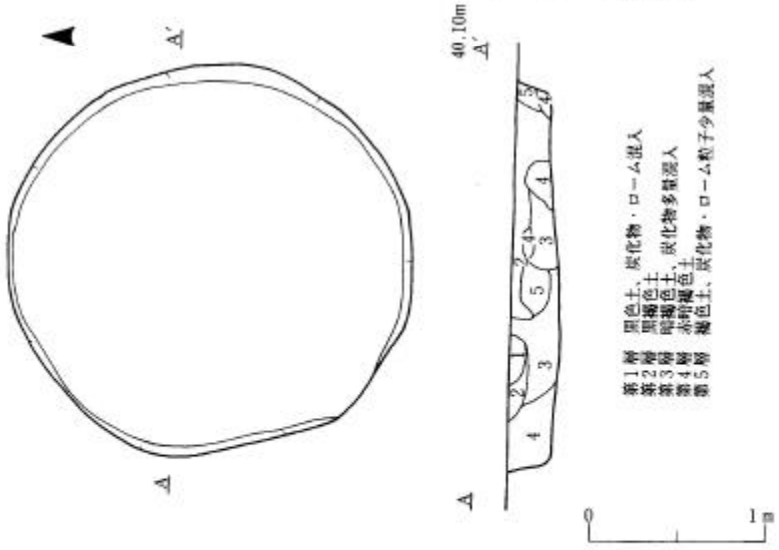
出土遺物

土器（第30図28、第36図137～139）

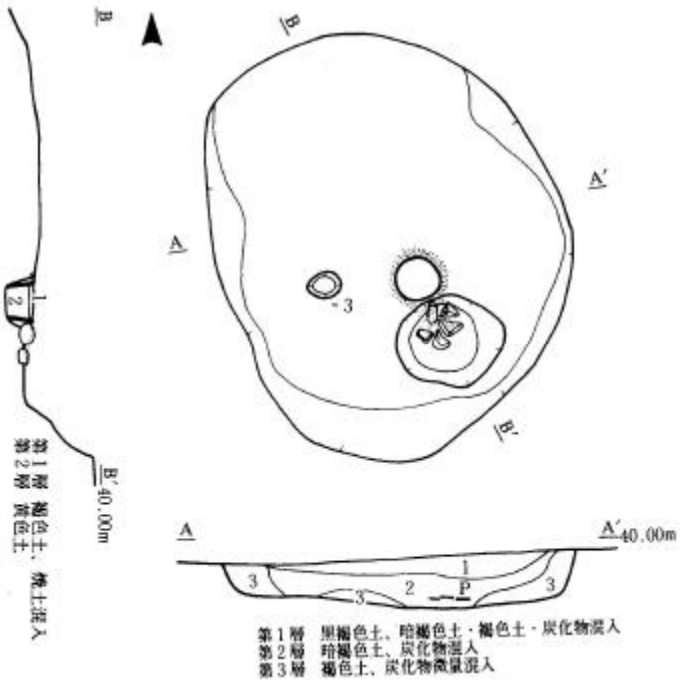
28は炉埋設土器、他は覆土出土である。28は深鉢形土器の胴部で、地文はＬＲ単節斜縄文（縦位回転）である。137・138は刺突が加飾される。



第19図　17号住居跡



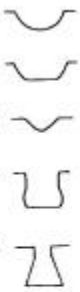
第20図　18号住居跡

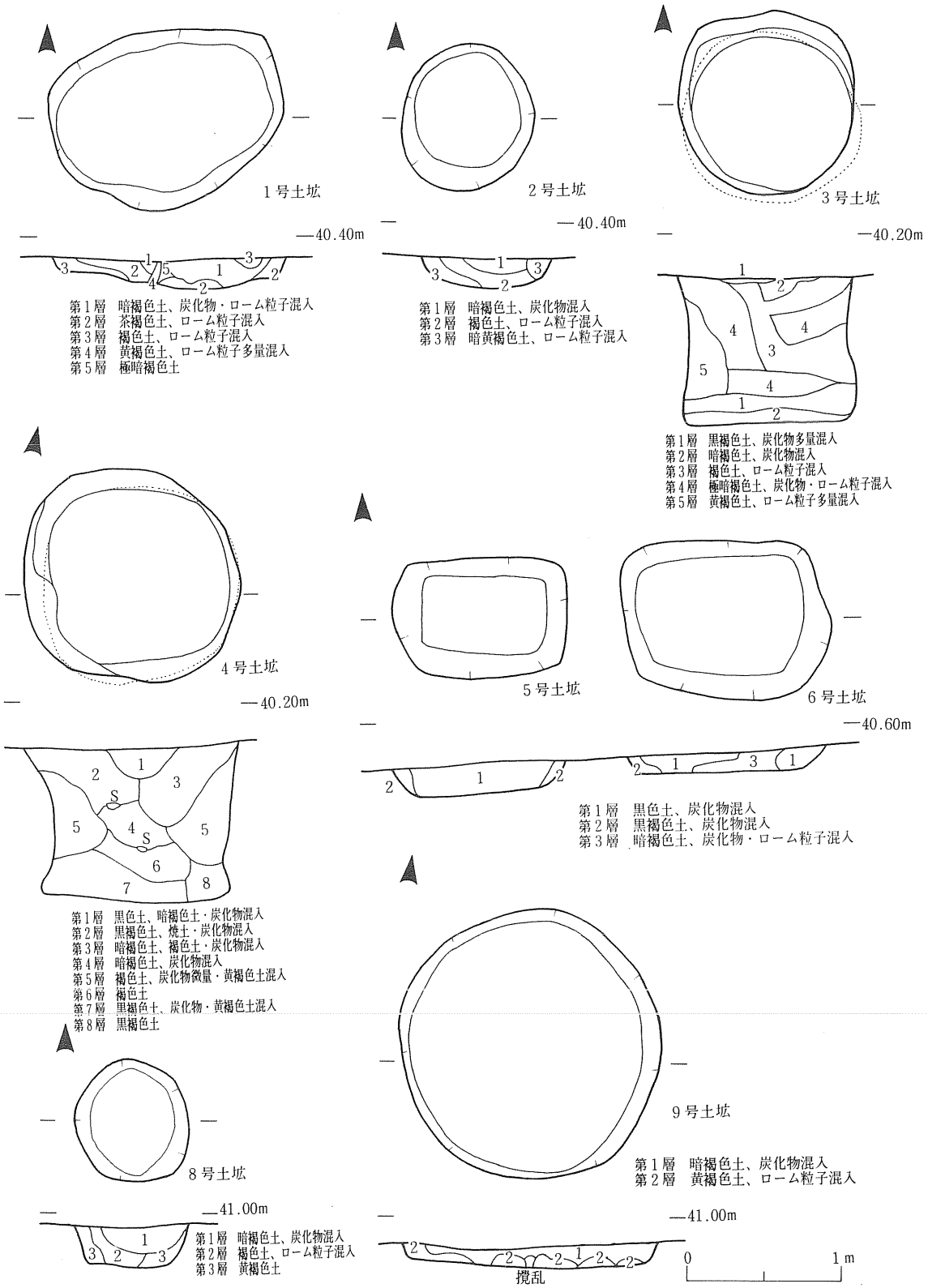


第21図　19号住居跡

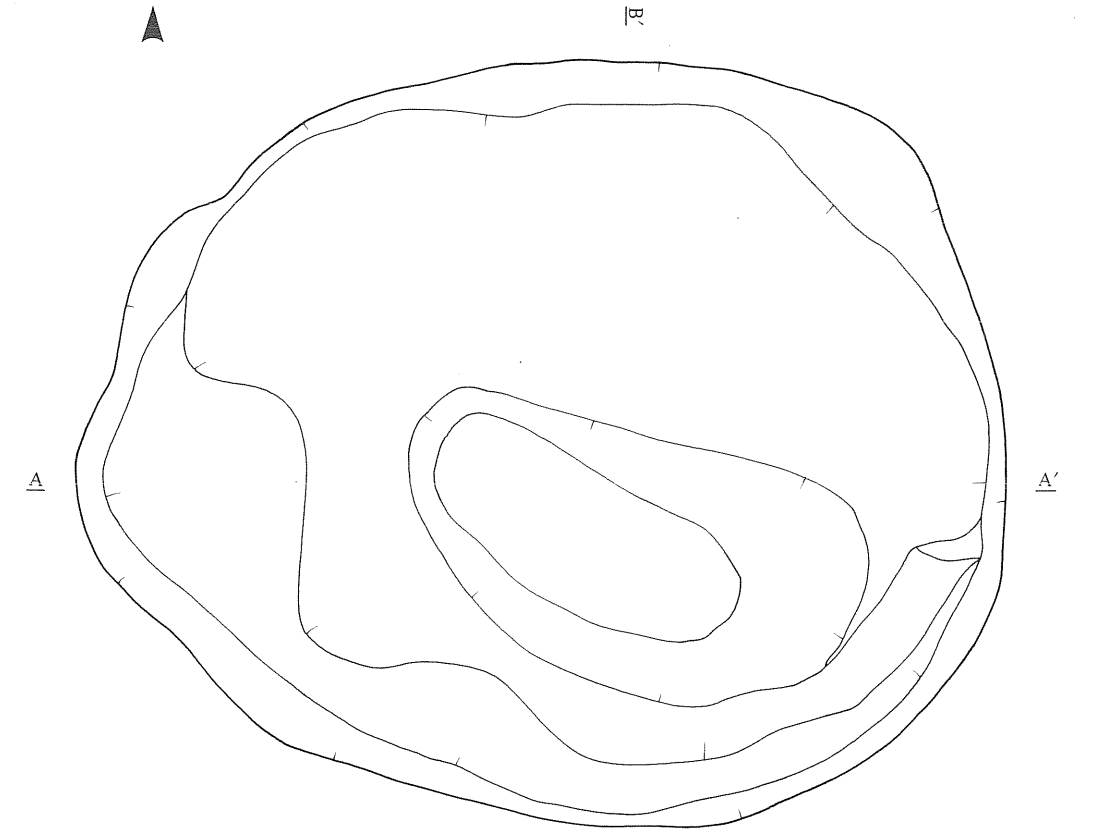
土　坑　一　覧　表

番号	規模（cm）			平面形	断面形	出土遺物	断面図
	長軸	短軸	深さ				
1	155	118	20	楕円形	②	第36図140～143、縄文前期末（大木６式）	
2	97	85	20	楕円形	①	第36図144、縄文中期（大木10式）	
3	120	110	93	楕円形	④	第36図145・146、縄文	
4	145		100	円　形	④	第36図147、縄文中期末（大木10式）	
5	112	80	20	長方形	②		
6	130	103	12	長方形	②		
7	490	405	82	楕円形	③	第36図148～153、縄文中期末（大木10式）	
8	80	75	26	楕円形	②		
9	182		13	円　形	②		
10	82		12	円　形	②		
11	182	150	138	楕円形	⑤		
12	134	76	18	小判形	②		
13	105	58	15	楕円形	②		
14	153	92	25	小判形	②		
15	186	90	24	小判形	②		
16	205	112	35	小判形	②		
17	105	73	22	楕円形	②		
18	65	50	47	楕円形	①		




1号土坑
—40.40m
第1層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第2層　茶褐色土、ローム粒子混入
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第4層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
第5層　極暗褐色土
2号土坑
—40.40m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　暗黄褐色土、ローム粒子混入
3号土坑
—40.20m
第1層　黒褐色土、炭化物多量混入
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土、ローム粒子混入
第4層　極暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
第5層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
4号土坑
—40.20m
第1層　黒色土、暗褐色土・炭化物混入
第2層　黒褐色土、焼土・炭化物混入
第3層　暗褐色土、褐色土・炭化物混入
第4層　暗褐色土、炭化物混入
第5層　褐色土、炭化物微量・黄褐色土混入
第6層　褐色土
第7層　黒褐色土、炭化物・黄褐色土混入
第8層　黒褐色土
5号土坑
6号土坑
—40.60m
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、炭化物・ローム粒子混入
8号土坑
—41.00m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　褐色土、ローム粒子混入
第3層　黄褐色土
9号土坑
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子混入
—41.00m
攪乱
0
1 m

第22図　土　坑

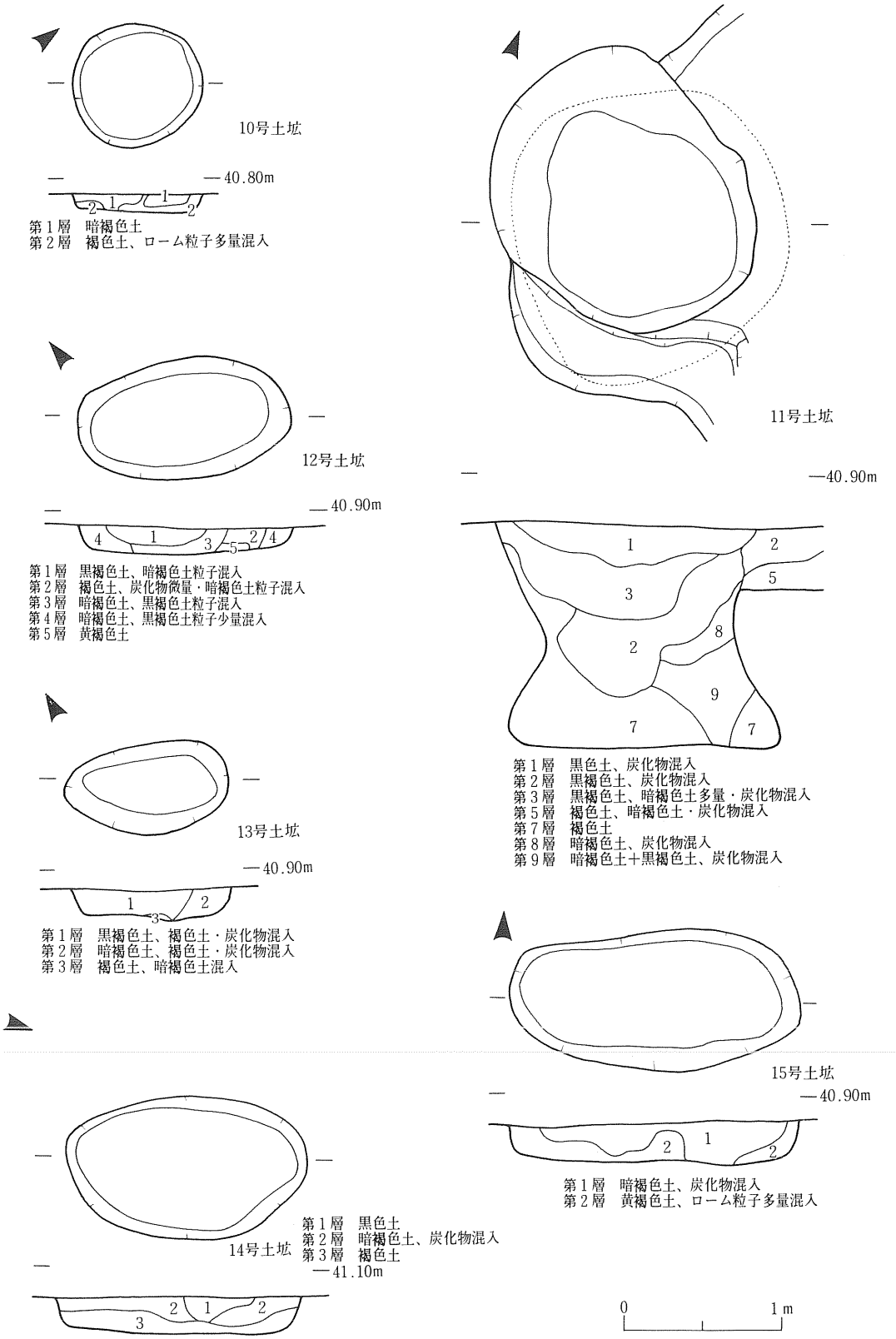


7号土坑

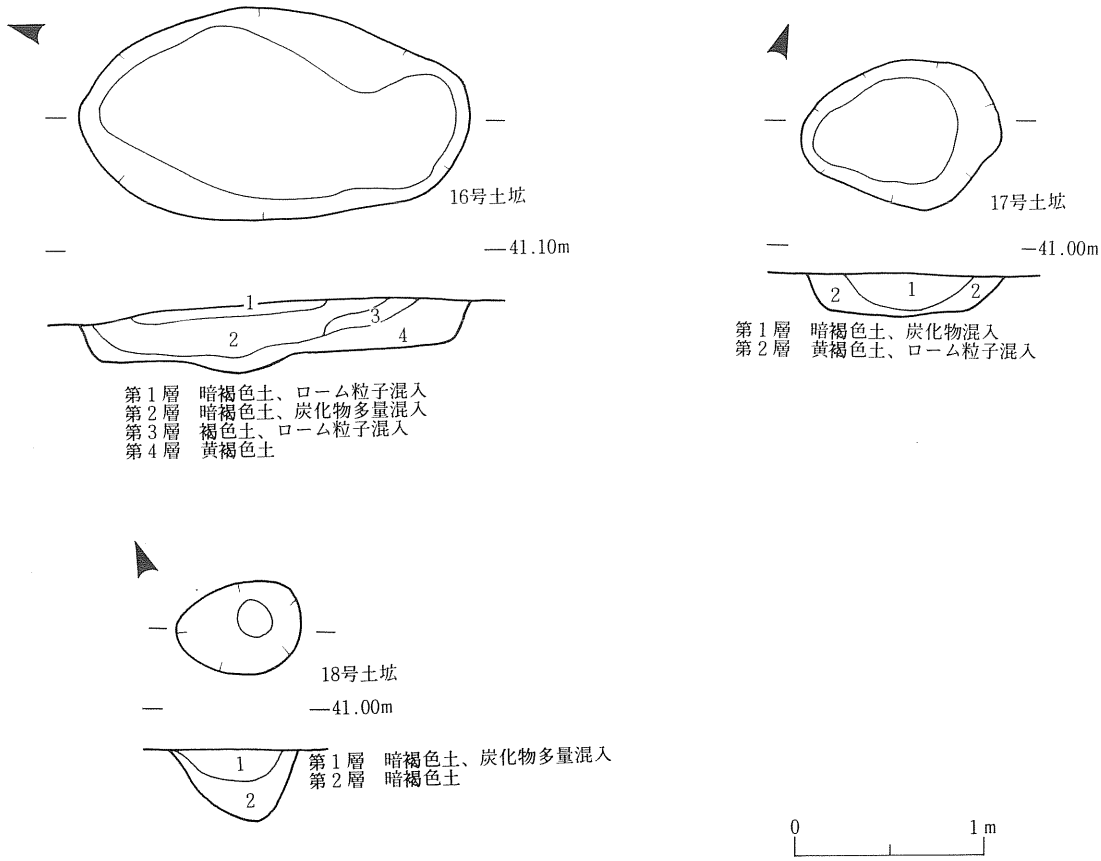
第1層　黒褐色土
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　暗褐色土、ローム粒子少量混入
第4層　褐色土
第5層　黒色土、炭化物混入
第6層　茶褐色土
第7層　暗赤褐色土、暗褐色土粒子混入
第8層　暗褐色土
第9層　黄褐色土、粘土粒子多量混入

0　1m

第23図　土　坑


10号土坑
40.80m
第1層　暗褐色土
第2層　褐色土、ローム粒子多量混入
11号土坑
40.90m
12号土坑
40.90m
第1層　黒褐色土、暗褐色土粒子混入
第2層　褐色土、炭化物微量・暗褐色土粒子混入
第3層　暗褐色土、黒褐色土粒子混入
第4層　暗褐色土、黒褐色土粒子少量混入
第5層　黄褐色土
第1層　黒色土、炭化物混入
第2層　黒褐色土、炭化物混入
第3層　黒褐色土、暗褐色土多量・炭化物混入
第5層　褐色土、暗褐色土・炭化物混入
第7層　褐色土
第8層　暗褐色土、炭化物混入
第9層　暗褐色土＋黒褐色土、炭化物混入
13号土坑
40.90m
第1層　黒褐色土、褐色土・炭化物混入
第2層　暗褐色土、褐色土・炭化物混入
第3層　褐色土、暗褐色土混入
15号土坑
40.90m
第1層　暗褐色土、炭化物混入
第2層　黄褐色土、ローム粒子多量混入
14号土坑
第1層　黒色土
第2層　暗褐色土、炭化物混入
第3層　褐色土
41.10m
0
1m

第24図　土　坑



第25図　土　坑

出土土器

遺構内、遺構外の土器について、群、類に分けて述べてみたい。

1群土器（第31図34、第36図140～143）

細い粘土紐を直線、鋸歯状に貼り付け、平行する隆線に半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。

2群土器（第31図29～33、第37図154～161）

細い粘土紐を直線、円形、鋸歯状に貼り付け、半截竹管状工具内面による連続爪形文を施すものである。

A－1類（160）口縁部が直立する深鉢形土器である。

A－2類（156～158）口縁部が「く」の字状に内屈する深鉢形土器である。

A－3類（29～31）口縁部が大きく外反する深鉢形土器である。

3群土器（第31図35、第37図162）

細い粘土紐を直線、鋸歯状に貼り付け、連続爪形文を施さないものである。

A－3類（162）

口縁部がゆるく外反する深鉢土器で、突起が付く。

4群土器（第26～30図1～20・22～26・28、第31～36図36～61・63～139・144～153、第37・38図163～194）

地文を施した後に沈線区画の磨消帯を有するものである。磨消帯は「J」字状、「U」字状、「S」字状、「O」字状、波状などがみられる。稜線を施すもの、刺突を加飾するものなどもある。地文は単節、複節、無節斜縄文、撚糸文などで、口頸部に沈線を巡らし無文帯を作るもの、地文のみのものも含めた。

A－1類（16・43・68・69）

口縁部が直立する深鉢形土器である。68・69は磨消帯の幅が狭い。

A－3類（4～6・8～12・19・22・23・36～40・43～45・49～56・59・60・63～65・67・70・75～79・83・84・86・88・89・91・96～98・100～108・110・115～119・124・126・127・132・135～137・139・145・147・151・152・163～165・175～180・183～194）

口縁部が外反する深鉢形土器である。大きく外反するもの、ゆるく外反するもの、直立に近いものがある。平縁口縁が多く突起をもつものもある。

B－2類（14・57）

口縁部が内湾する鉢形土器である。14は胴部が、57は頸部が「く」の字状に折れる。

B類　（15）

把手に孔をもつものである。

5群土器（第29図21、第32図62）

刻線を葉脈状に施すものである。

B－2類（21）

口縁部が内湾する鉢形土器である。4単位の波状口縁をなし、磨消帯を施した後に刻線を湾曲させて施す。

6群土器（第30図27）

A－3類

口縁部がやや外反する深鉢形土器である。地文である撚糸文を施した後に、鈎状に沈線区画の磨消帯を施す。

7群土器（第38図195）

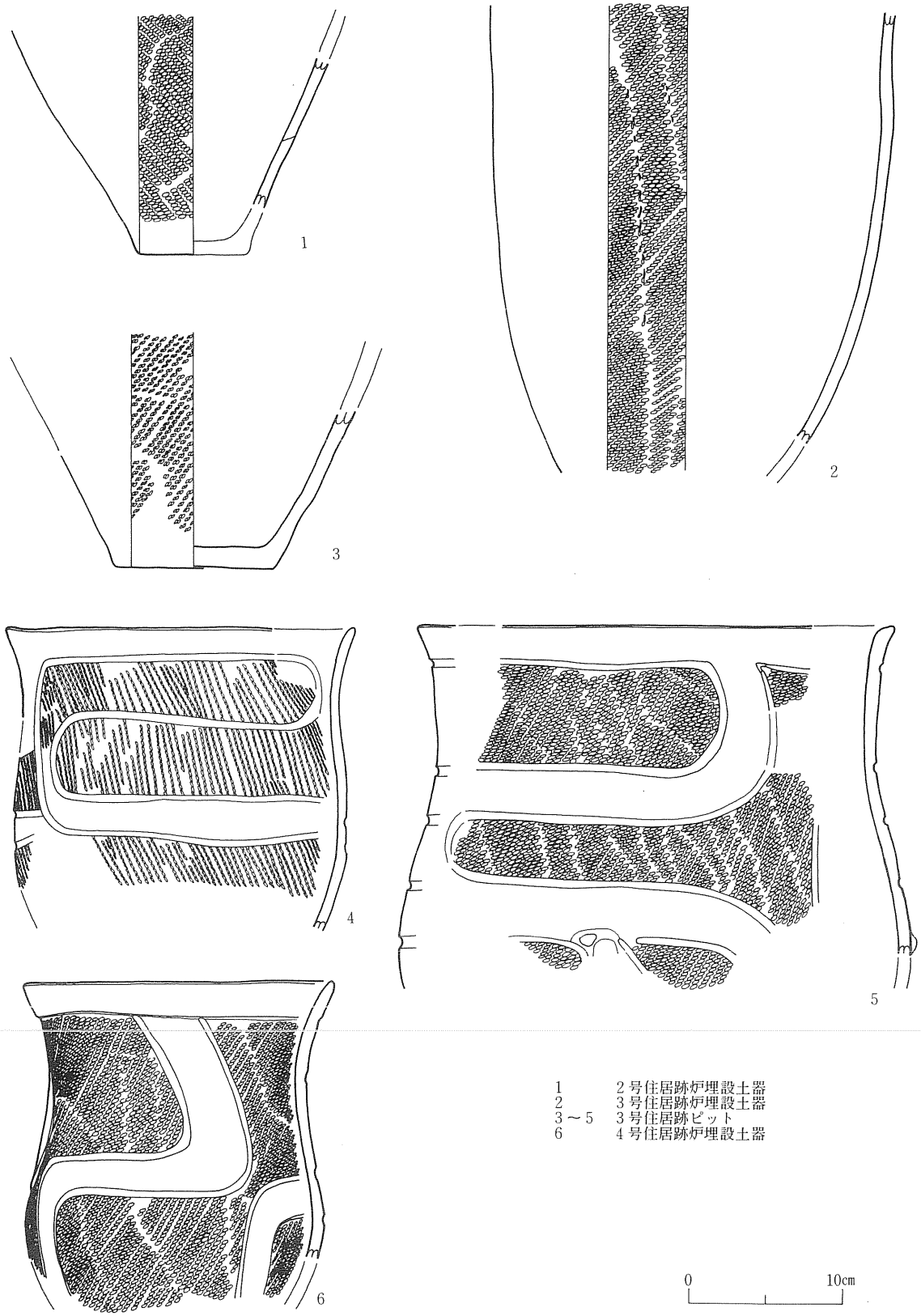
口唇部に小突起をもち、突起頂部下に刺突を施しし、その下に連鎖状文を施すものである。

8群土器（第38図196）

口縁部に平行沈線を施すものである。

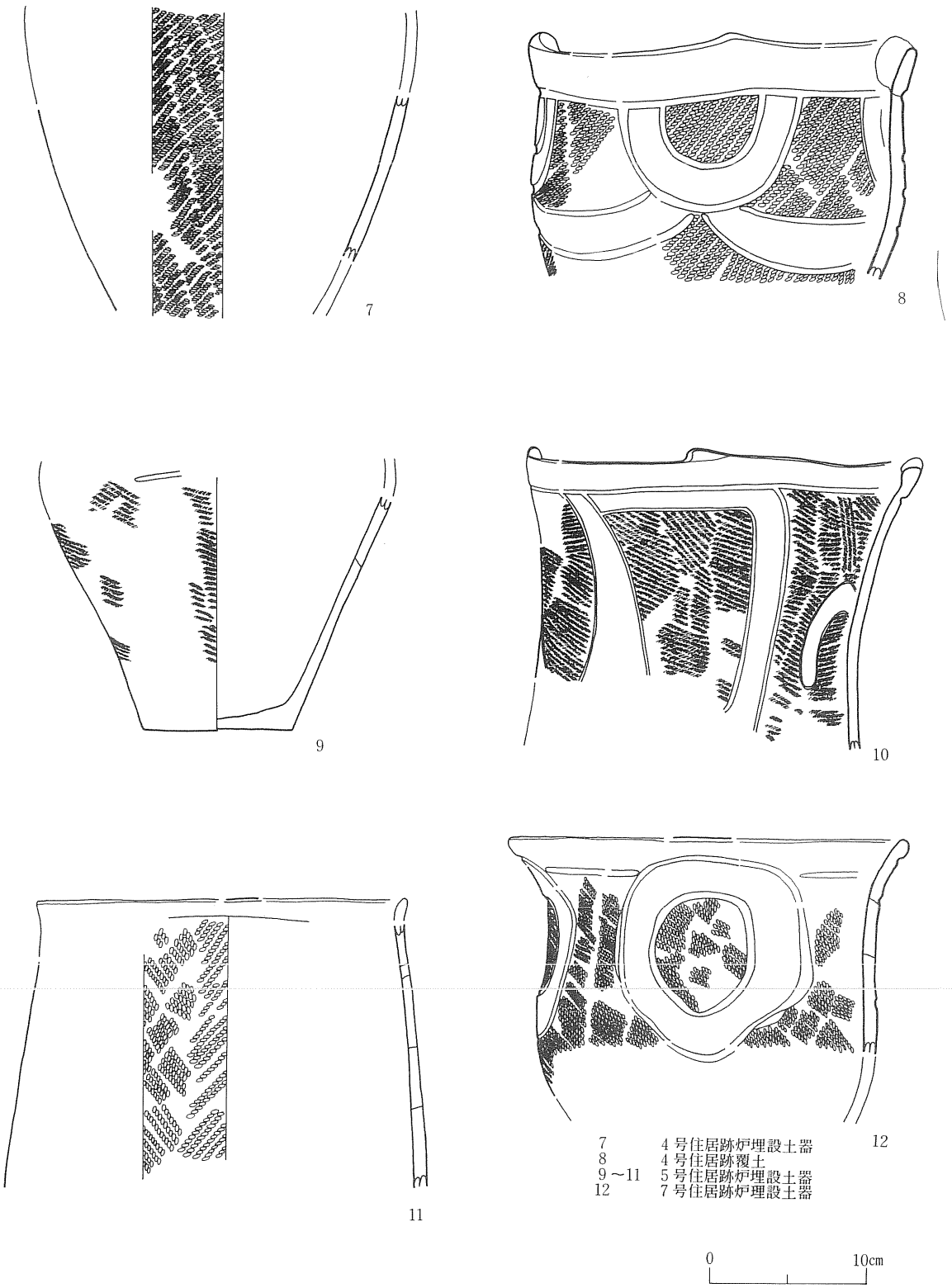
9群土器（第38図197）

B－3類

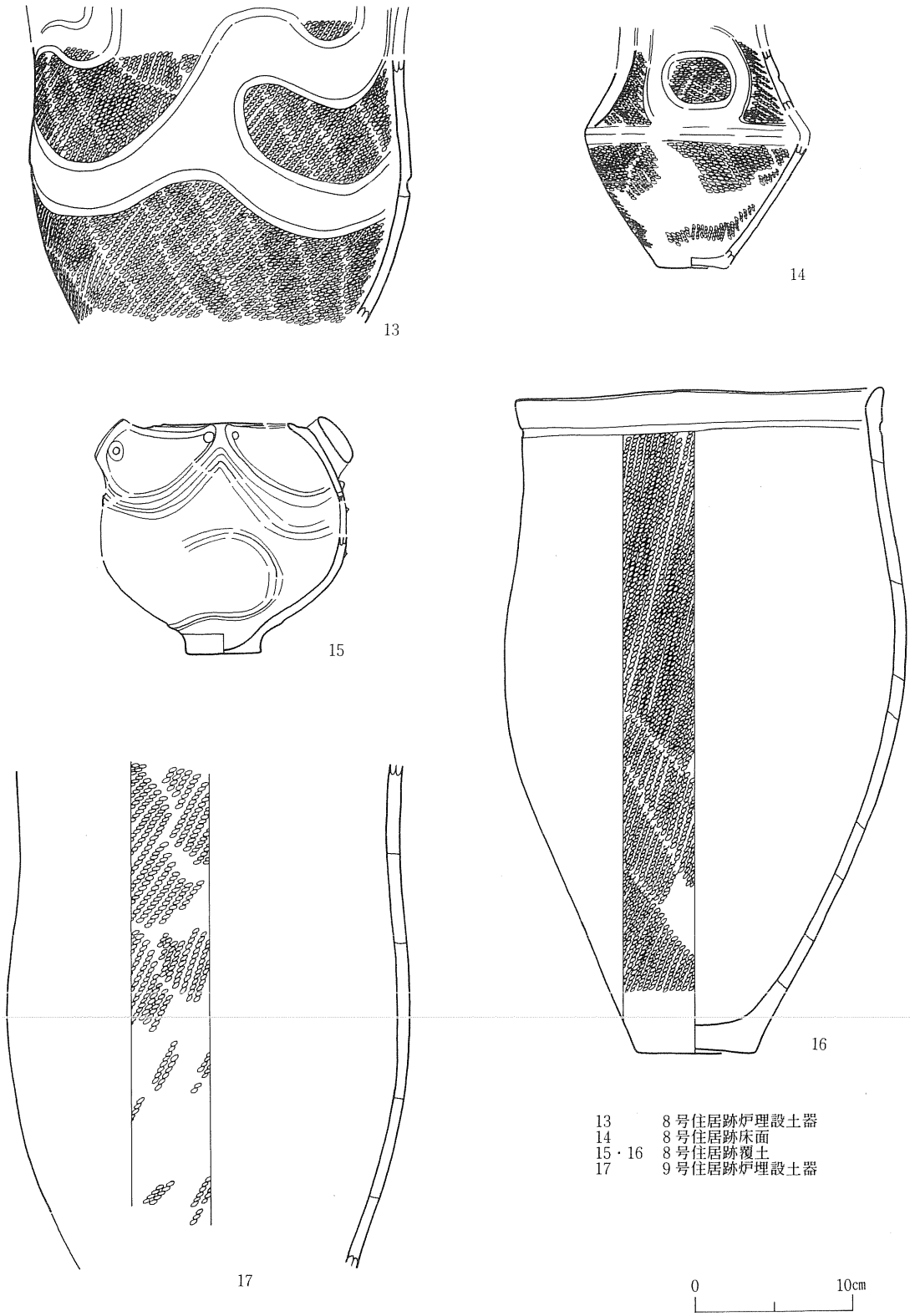


1　　2号住居跡炉埋設土器
2　　3号住居跡炉埋設土器
3～5　3号住居跡ピット
6　　4号住居跡炉埋設土器

第26図　遺構内出土土器

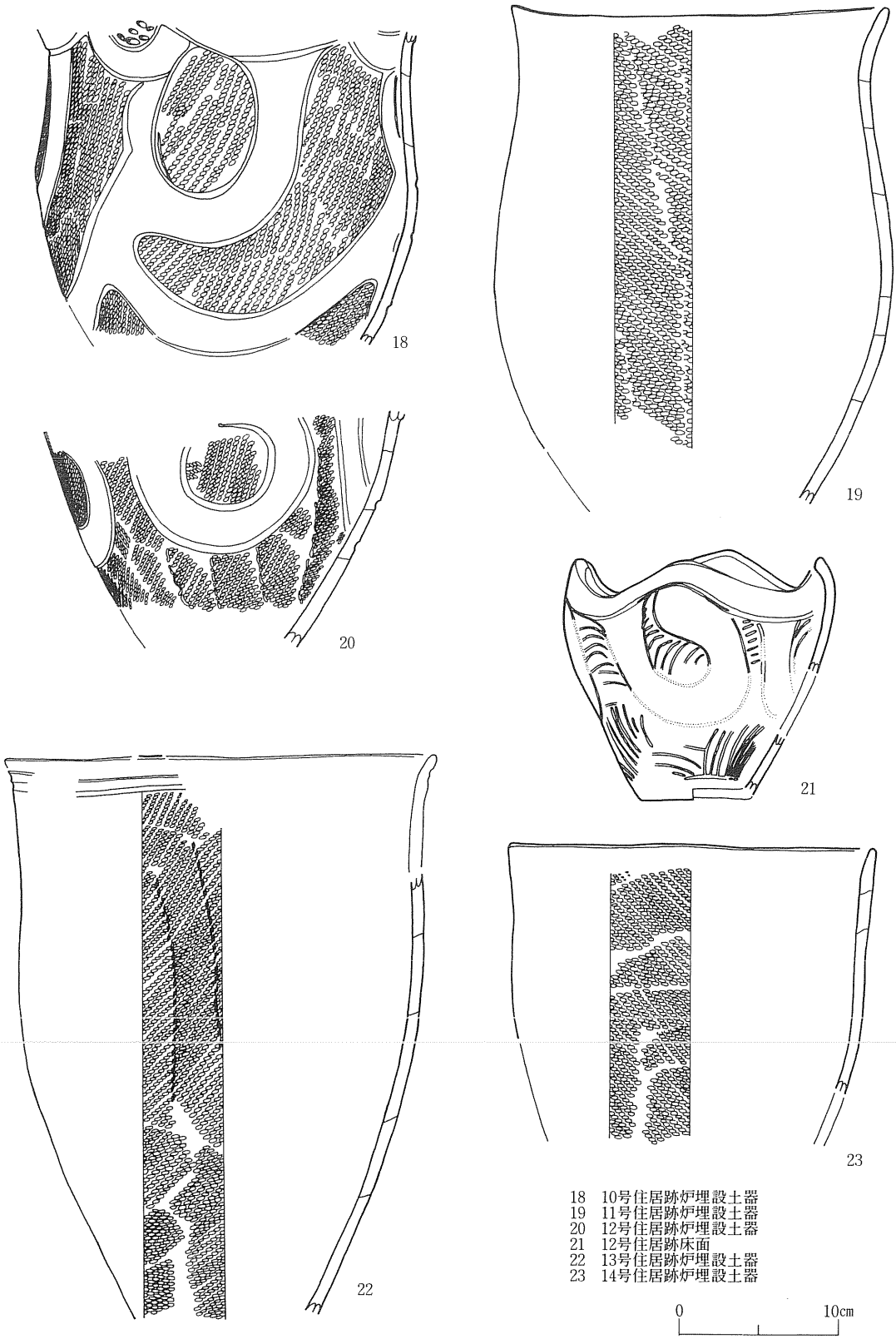


第27図　遺構内出土土器



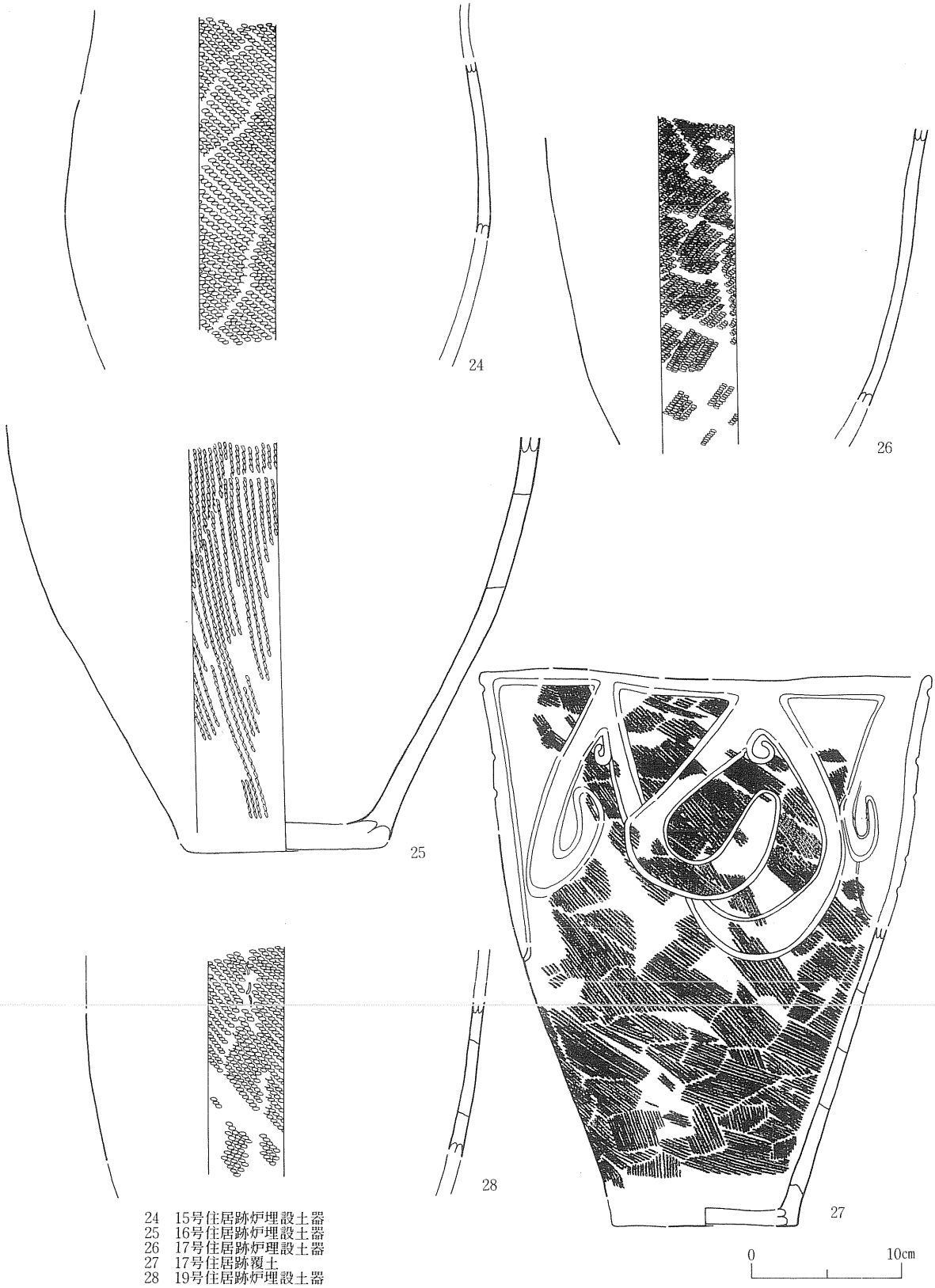
13　8号住居跡炉理設土器
14　8号住居跡床面
15・16　8号住居跡覆土
17　9号住居跡炉埋設土器

第28図　遺構内出土土器



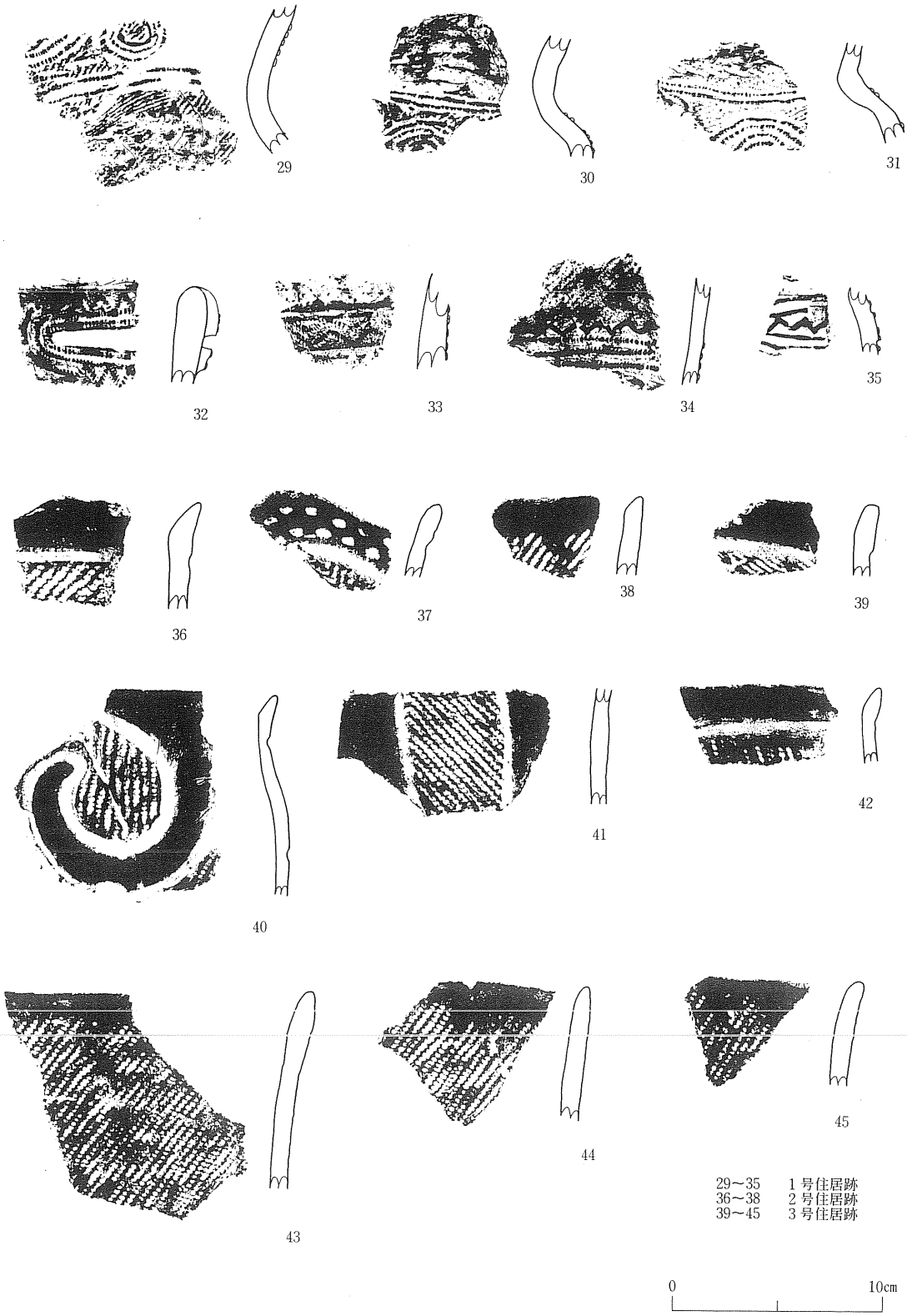
18　10号住居跡炉埋設土器
19　11号住居跡炉埋設土器
20　12号住居跡炉埋設土器
21　12号住居跡床面
22　13号住居跡炉埋設土器
23　14号住居跡炉埋設土器

第29図　遺構内出土土器

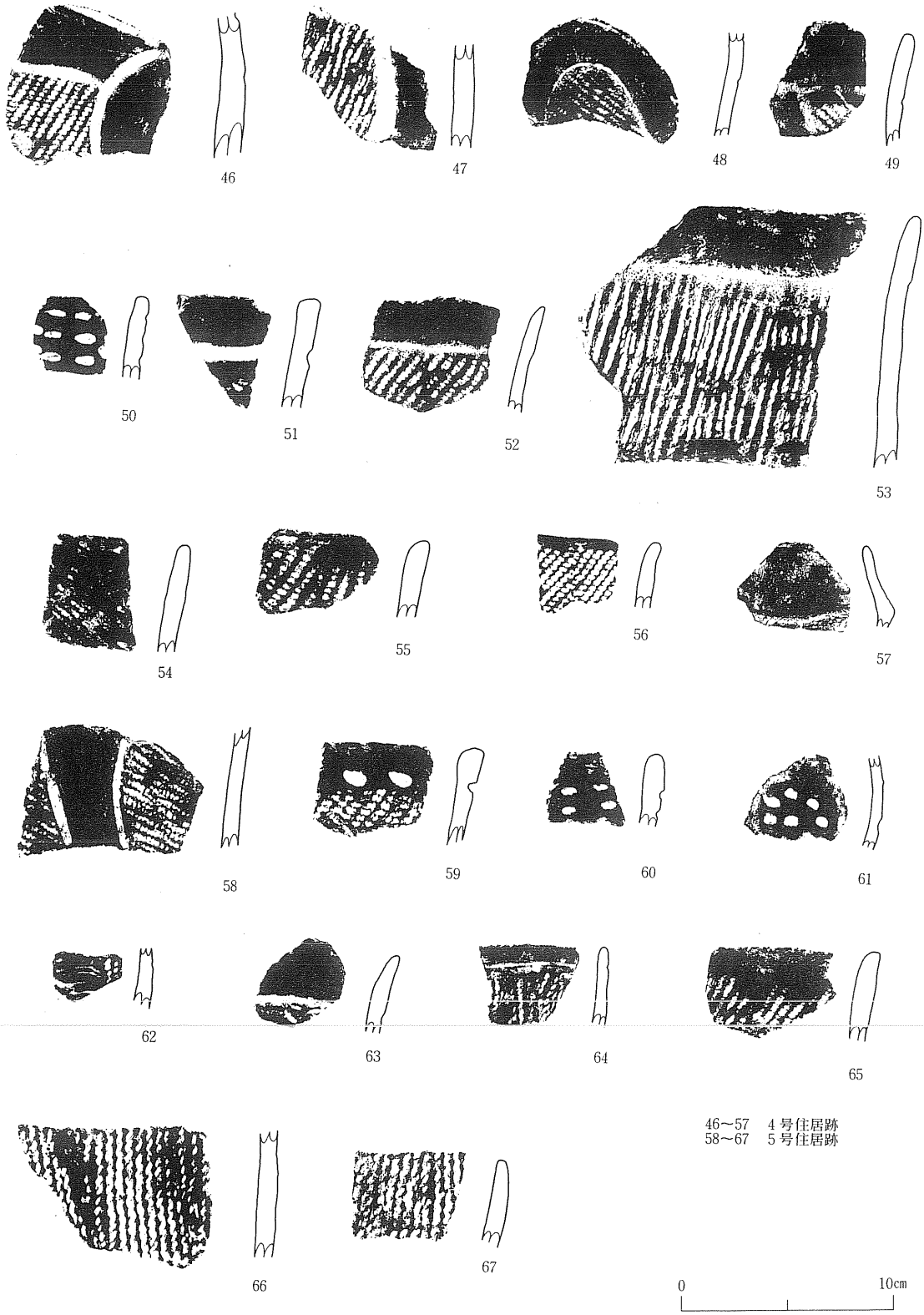


24　15号住居跡炉埋設土器
25　16号住居跡炉埋設土器
26　17号住居跡炉埋設土器
27　17号住居跡覆土
28　19号住居跡炉埋設土器

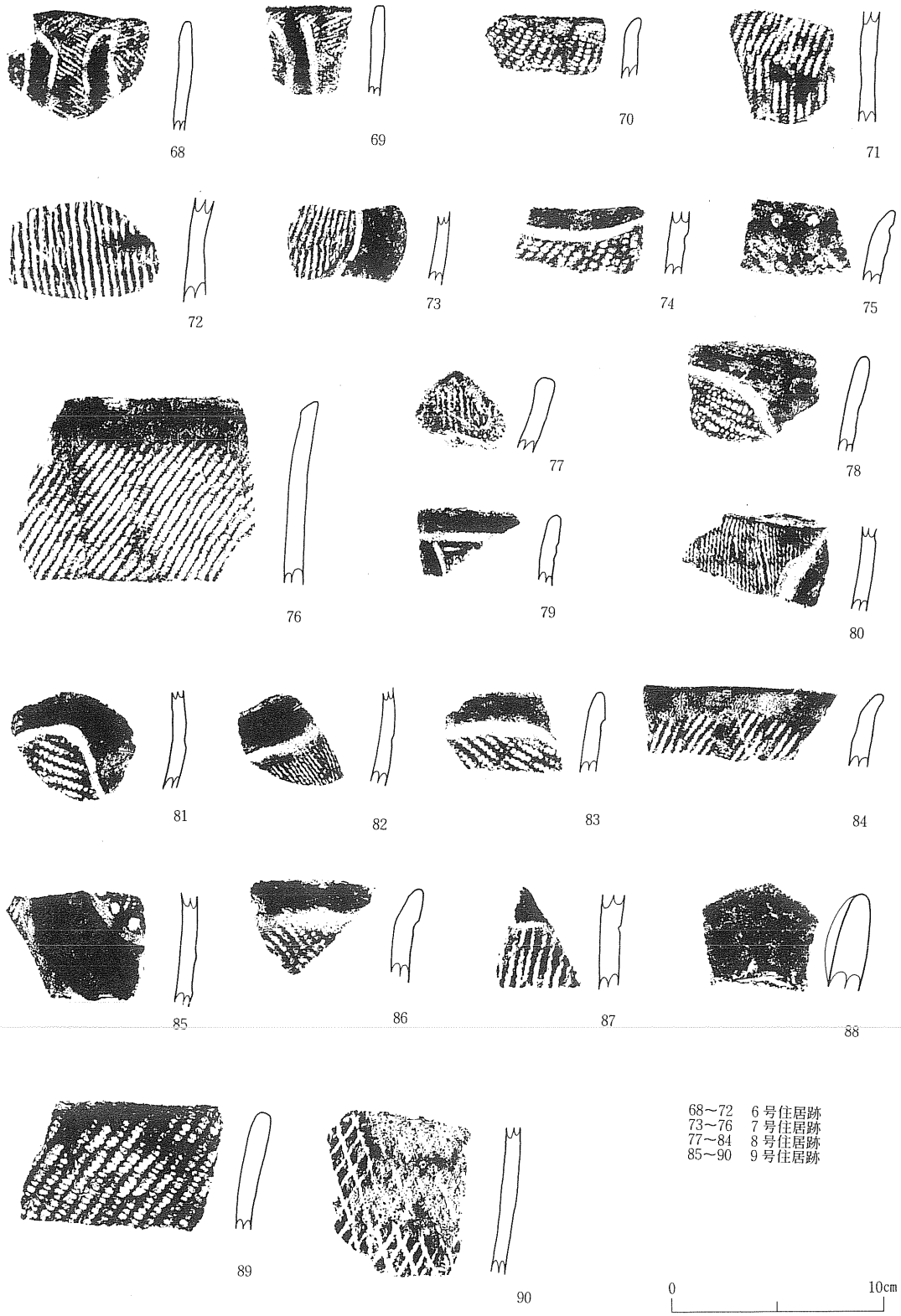
第30図　遺構内出土土器



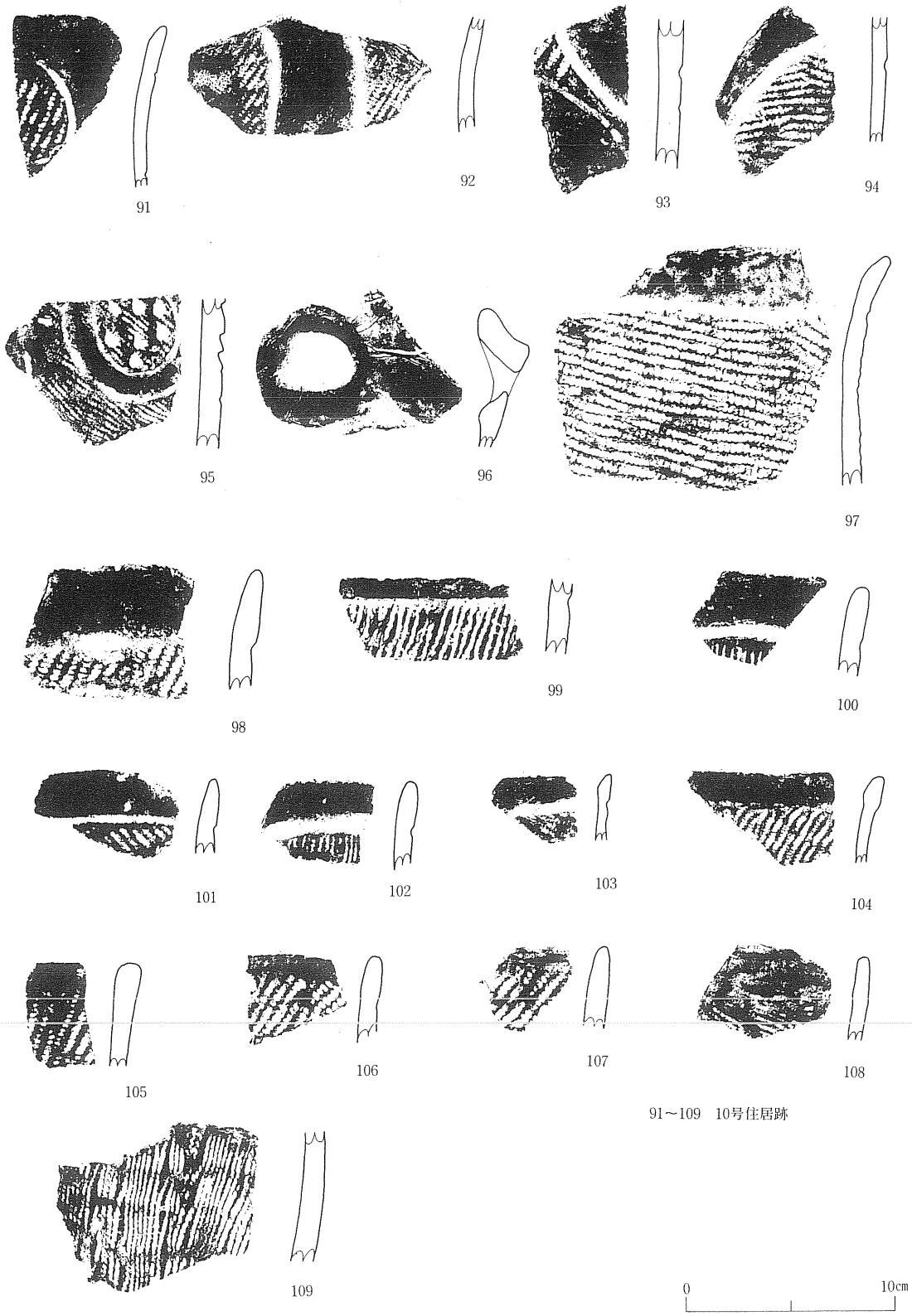
第31図　遺構内出土土器



第32図　遺構内出土土器

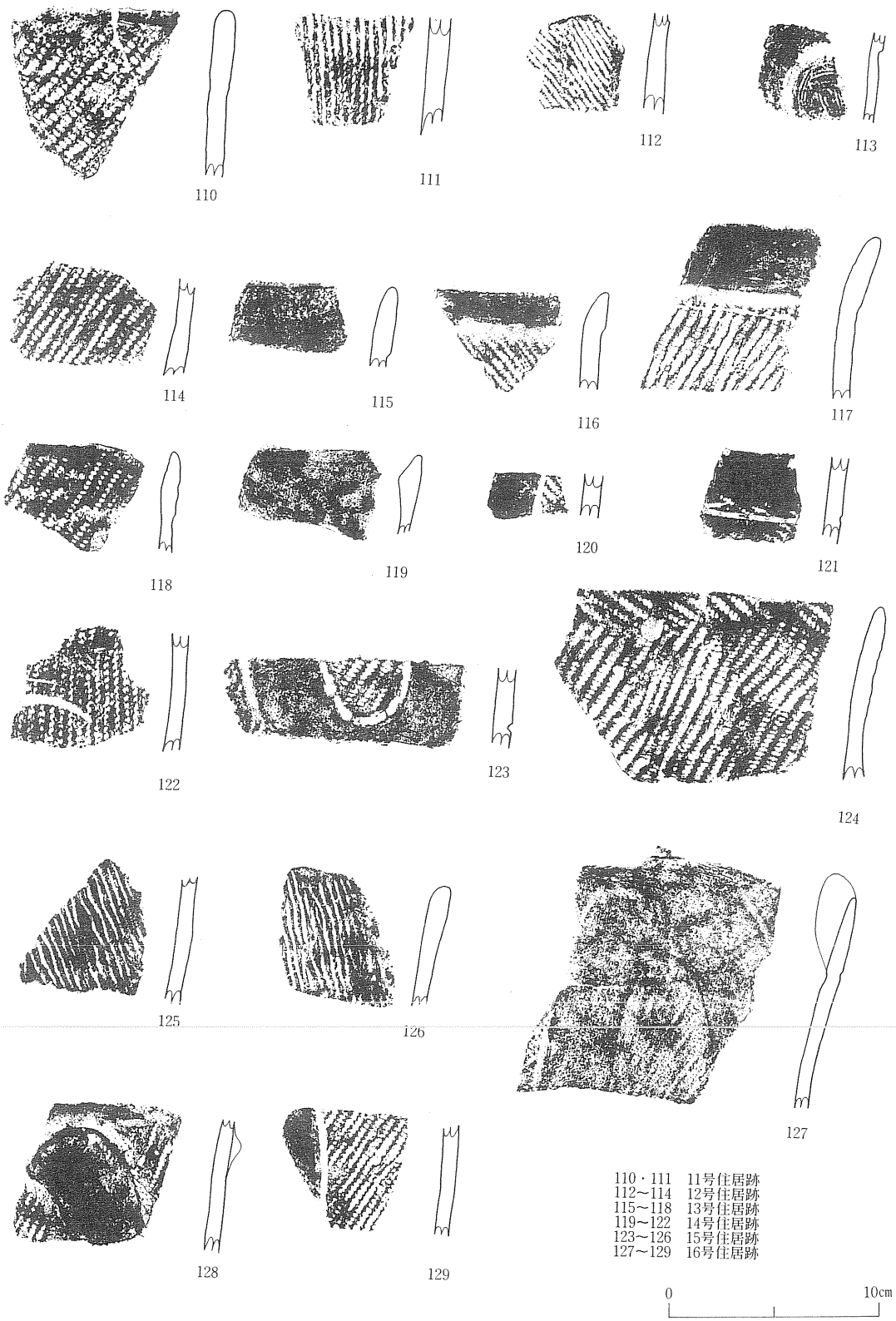


第33図　遺構内出土土器

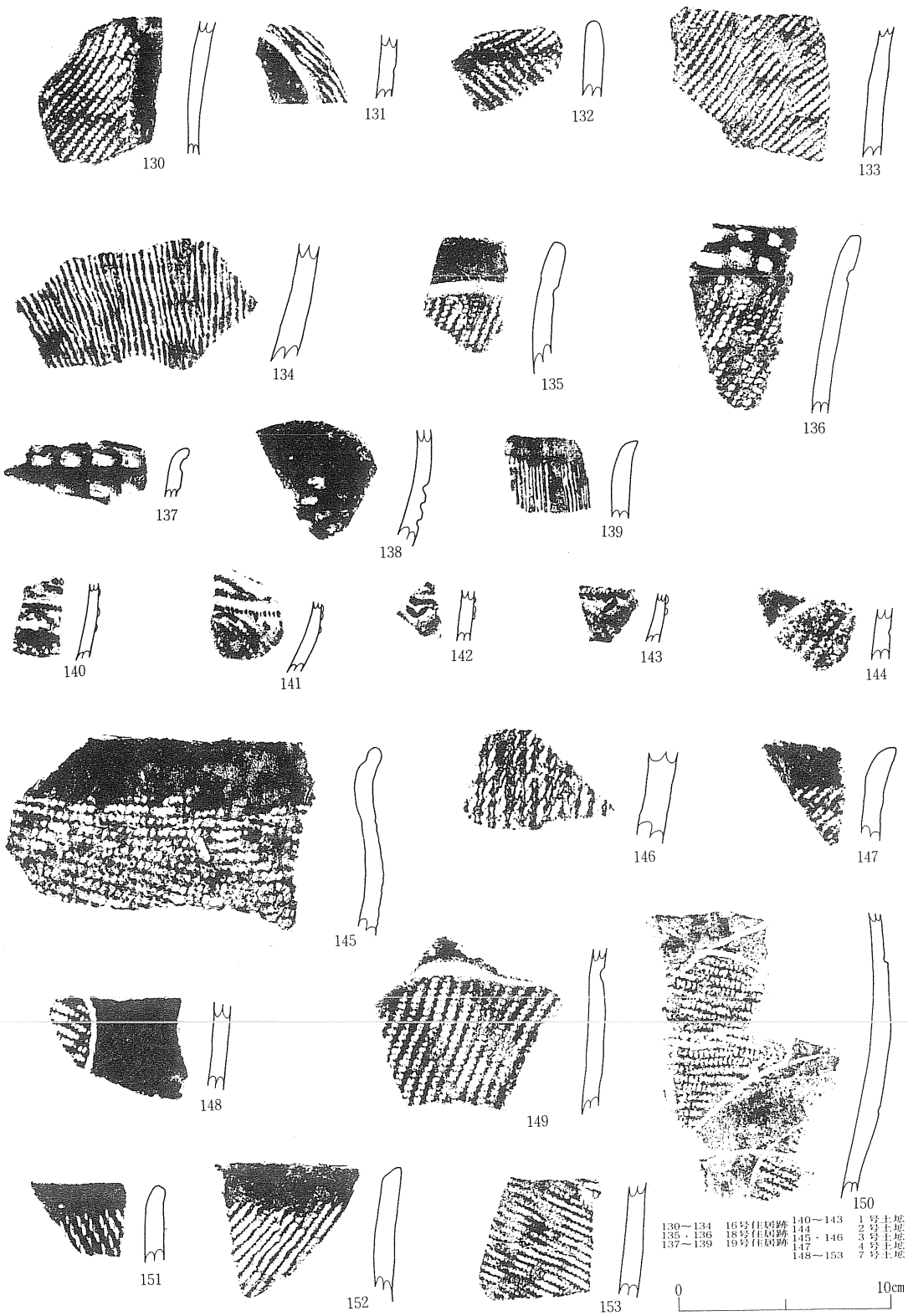


91～109　10号住居跡

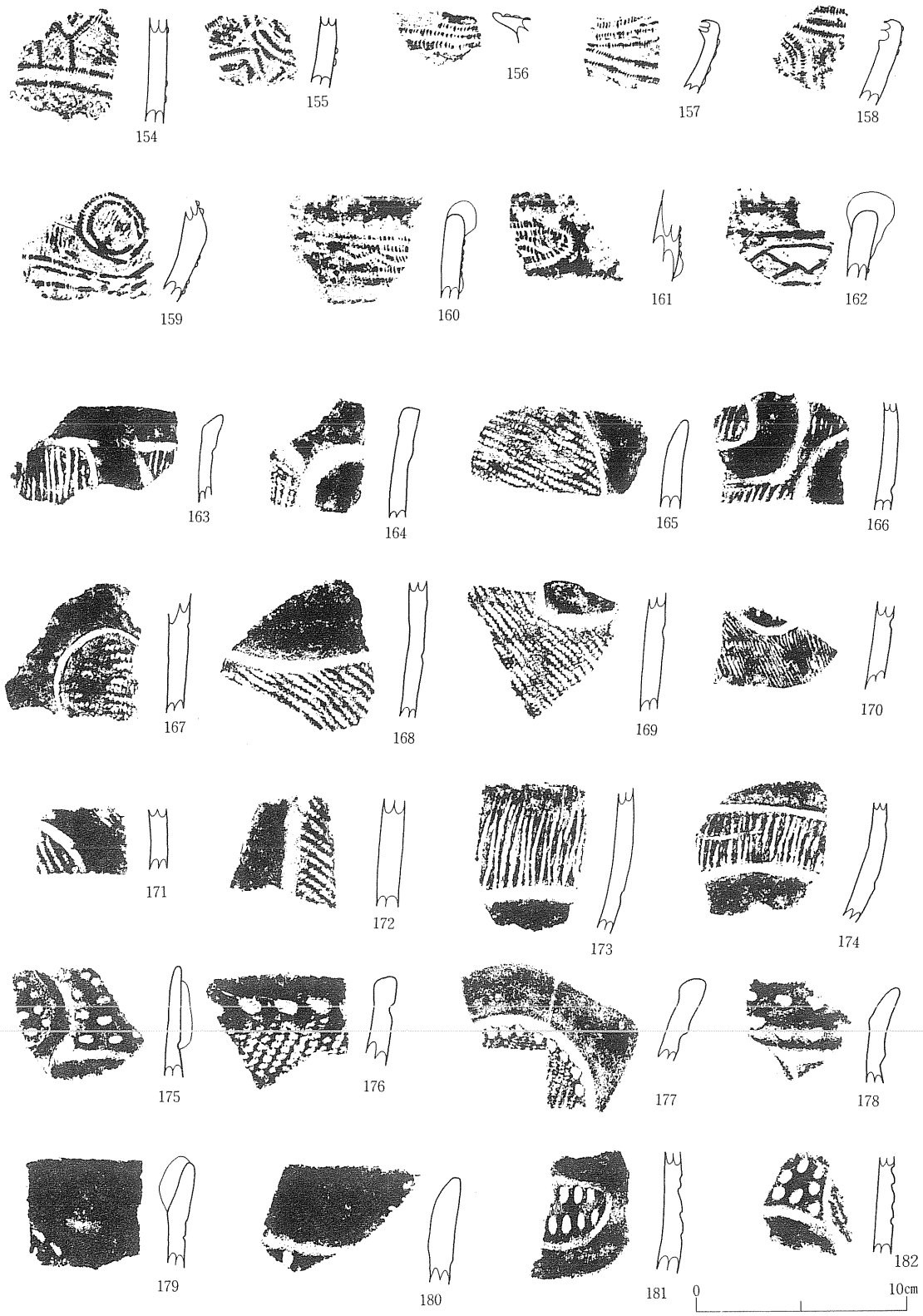
第34図　遺構内出土土器



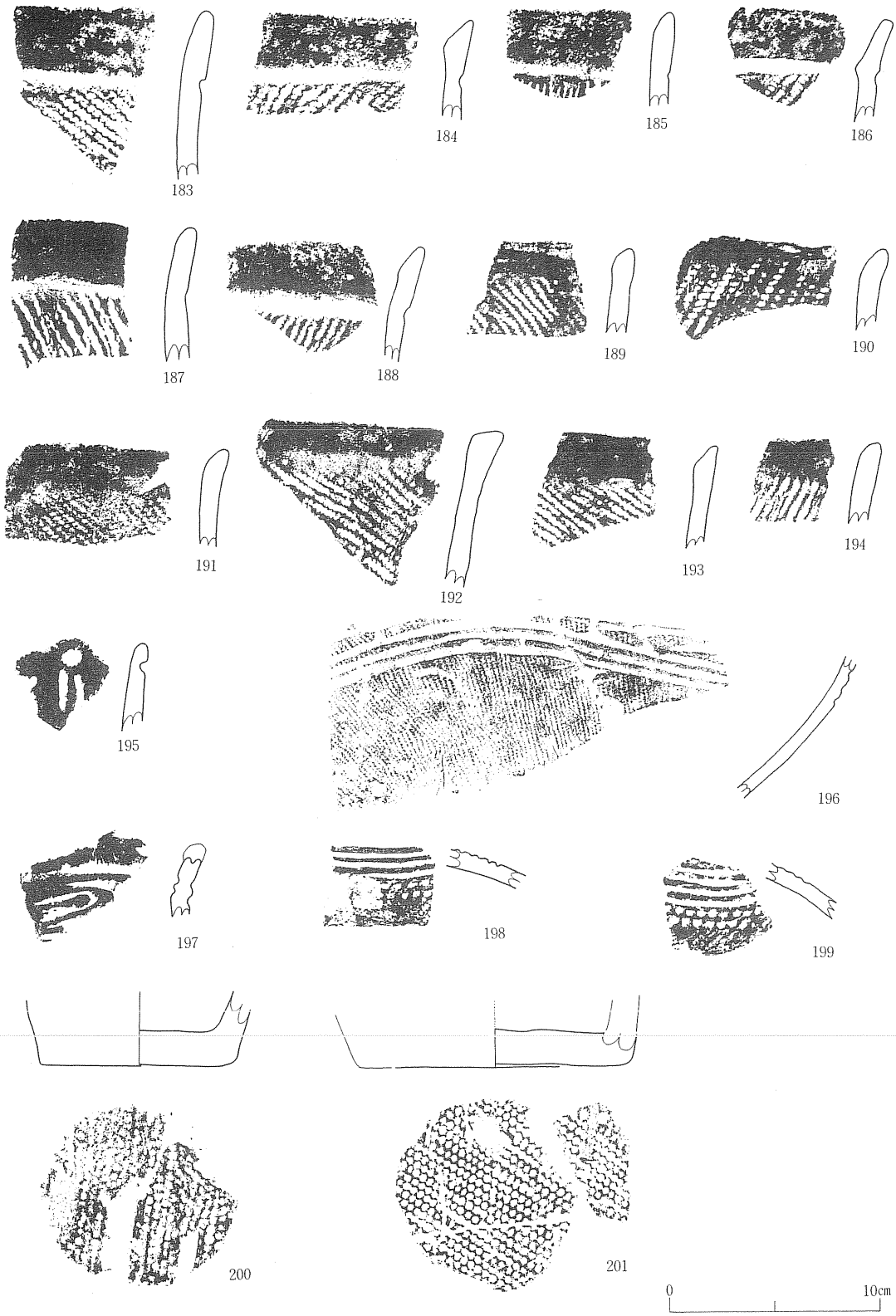
第35図　遺構内出土土器



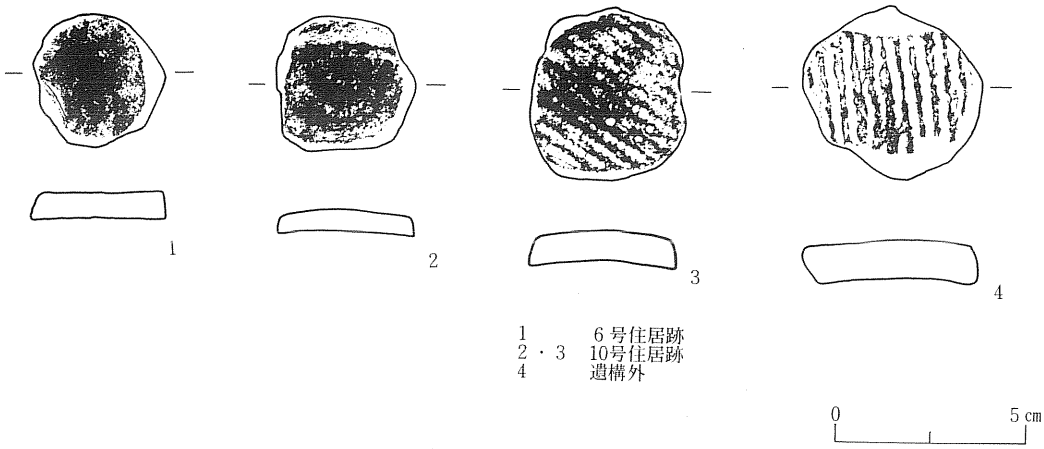
第36図　遺構内出土土器



第37図　遺構外出土土器



第38図　遺構外出土土器



第39図　土製品

小突起をもつ鉢形土器である。工字文を施し、小突起には刺突を施す。

10群土器（第38図198・199）

D類

いずれも壺形をなすもので、平行沈線と連続刺突文を施す。

土製品（第39図）

1～3は遺構内、4は遺構外出土の再利用土製品（円盤状土製品）である。土器片を利用したものである。

遺構外出土石器

石鏃（第42図28～30）　有茎・無茎のものがある。硬質頁岩製である。

石匙（第42図31～39）　縦型をなすものであるが、36～39は三ヵ月状を呈する。硬質頁岩製である。

ヘラ状石器（第42図40～43）　40～42は両面加工、43は片面加工である。40を除いては斧としての機能も考えられる。硬質頁岩製である。

掻器（第42図44・45）　片面加工である。硬質頁岩製である。

削器（第42図46・47）　片面加工である。硬質頁岩製である。

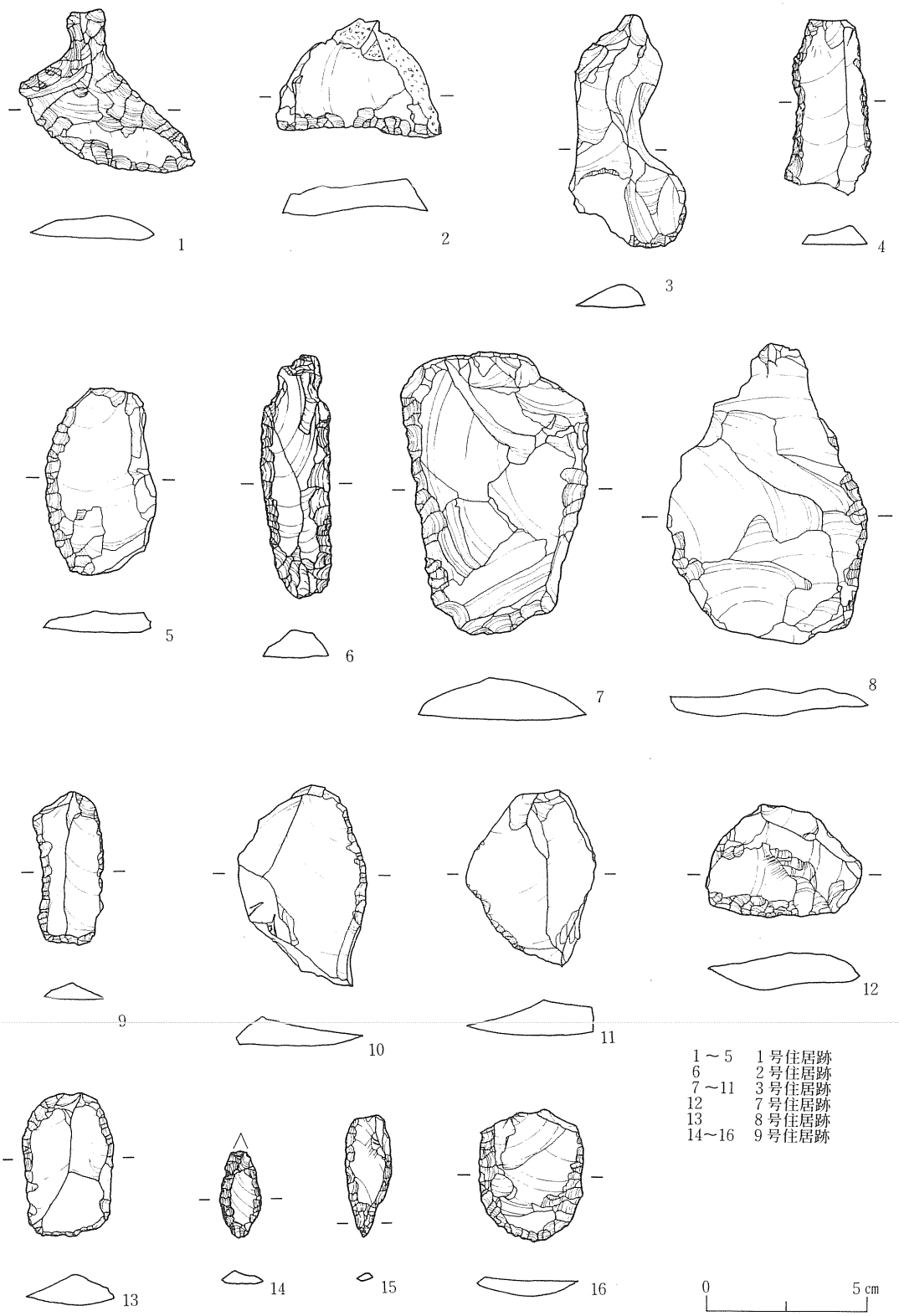
石錘（第43図48・49）両端を打ち欠くものである。

くぼみ石（第43図50～53）　くぼみ部が複数あるもの、片面・両面のものがある。

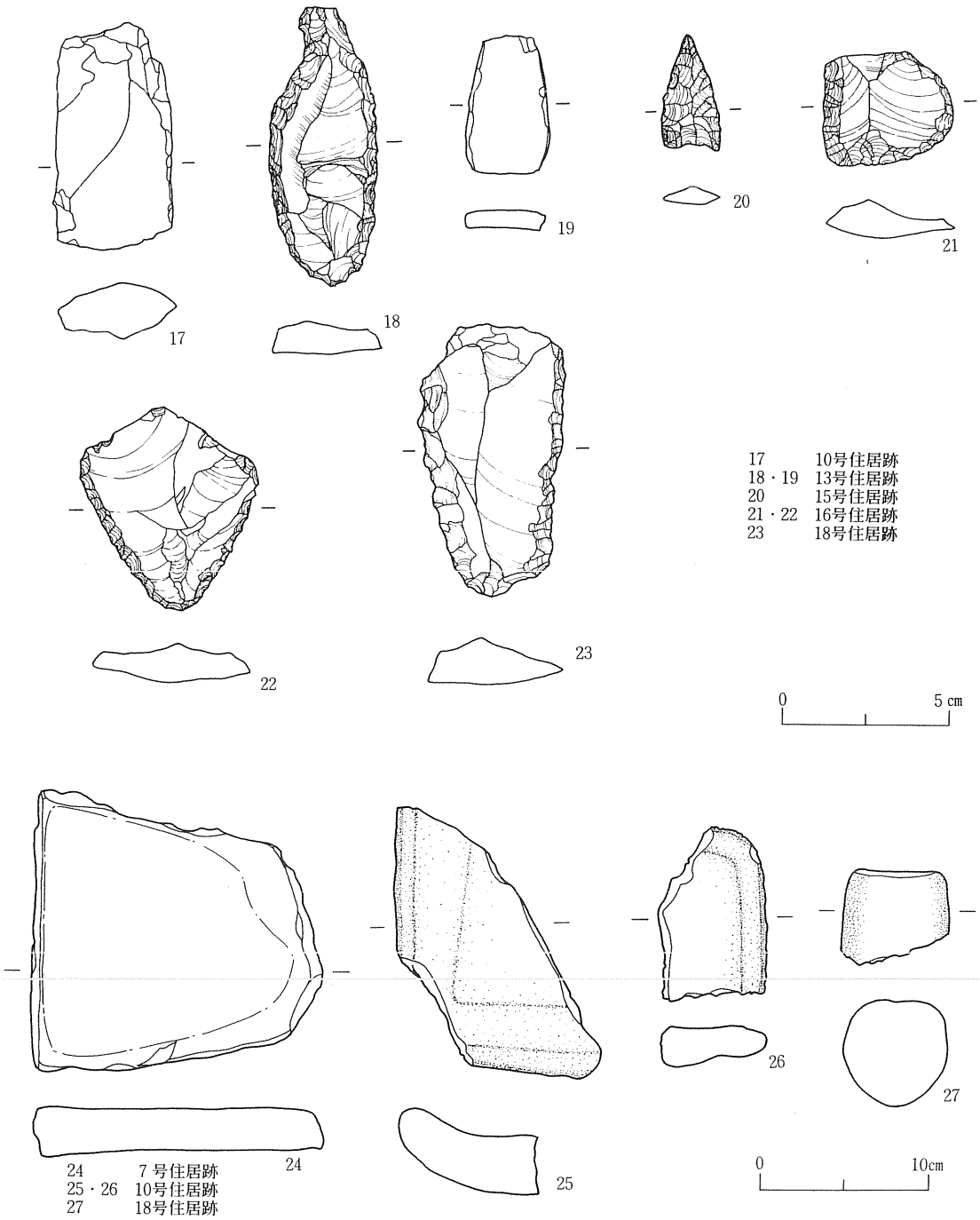
磨石・敲石（第43図54～57）　全面が磨れるもの、側面に敲打痕の認められるものもある。

石皿（第43図58）　破損している。

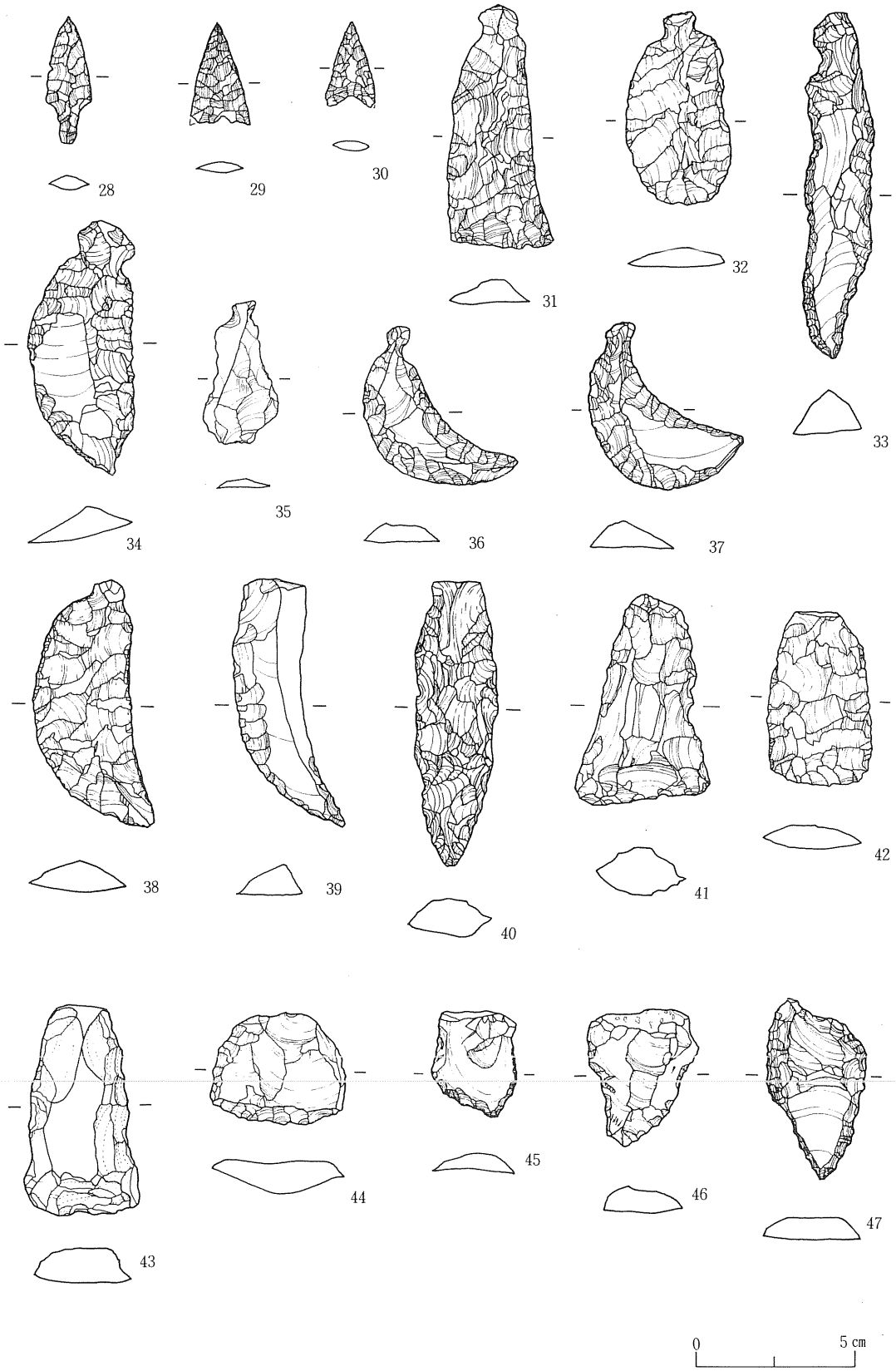
磨製石斧（第44図59～62）　59は小形磨製石斧である。破損しているものもみられる。凝灰岩製である。



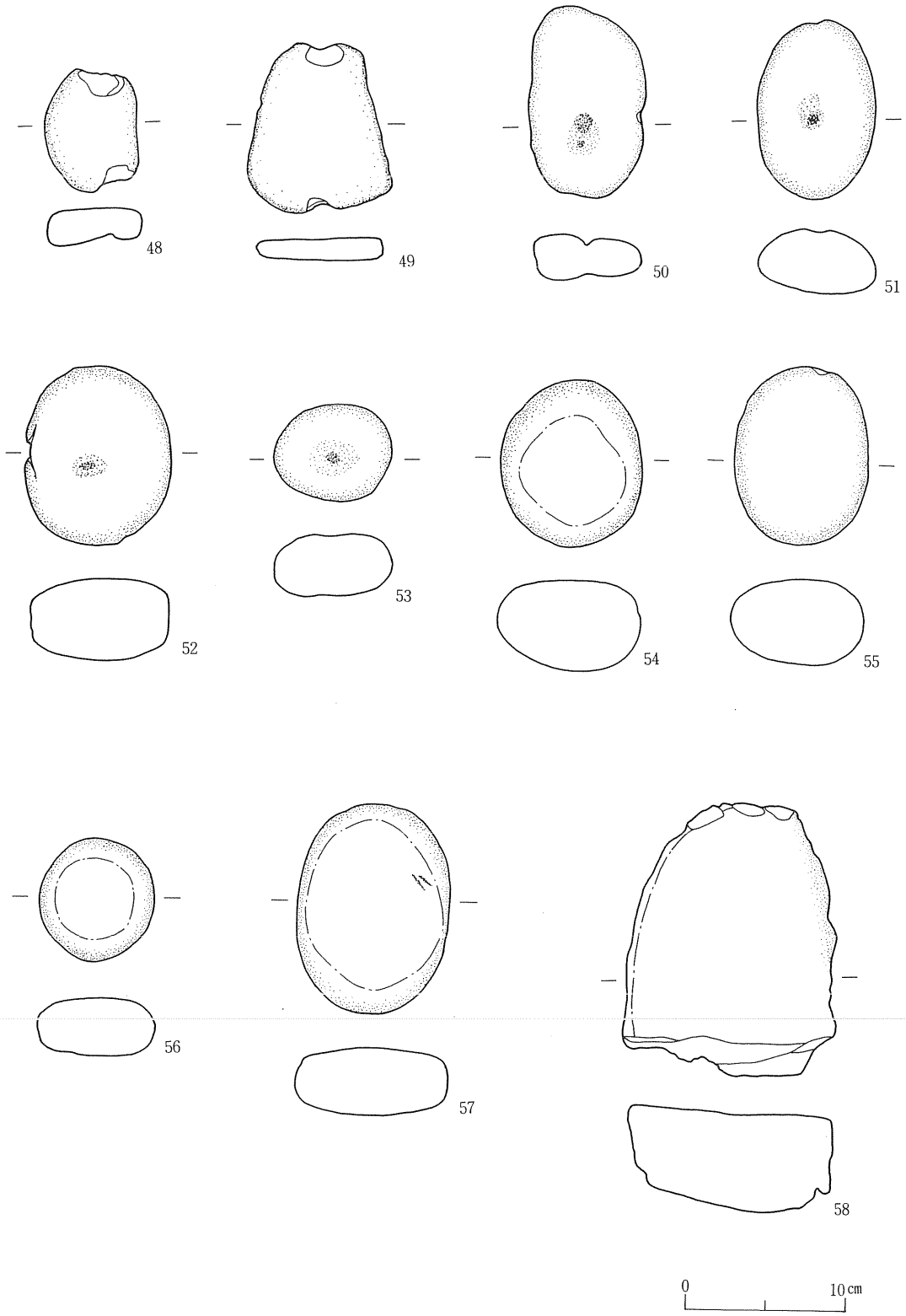
第40図　遺構内出土石器



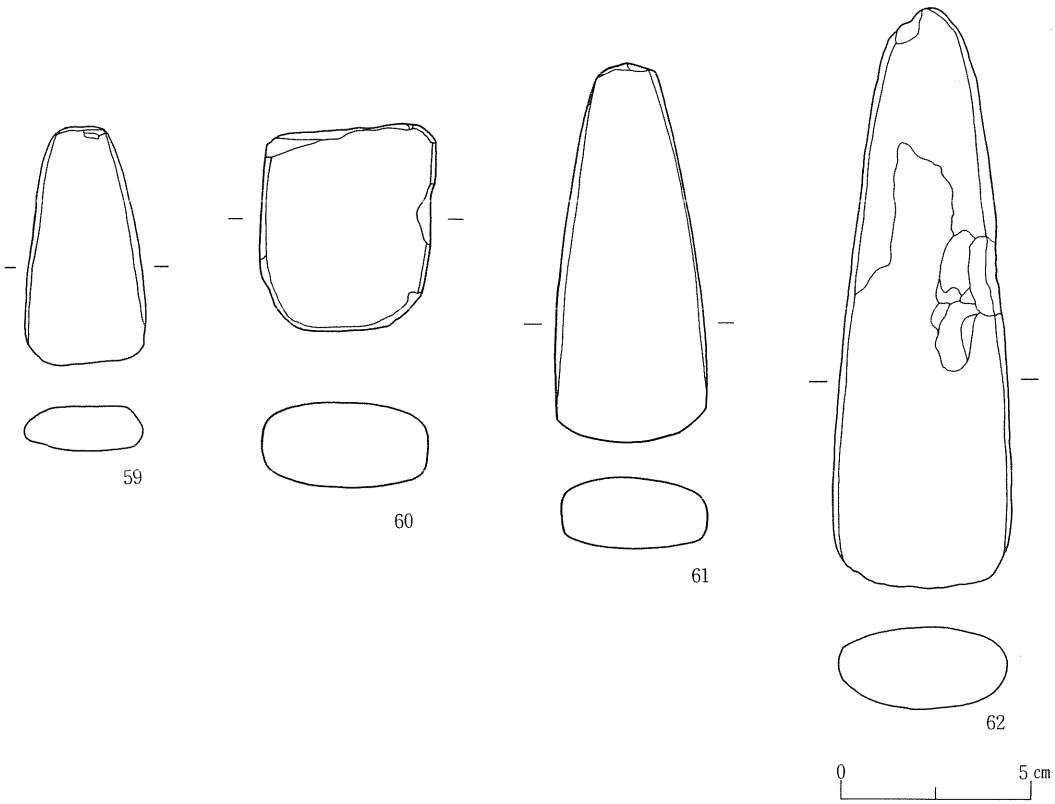
第41図　遺構内出土石器



第42図　遺構外出土石器



第43図　遺構外出土石器



第44図　遺構外出土石器

ま と め

調査の結果、竪穴住居跡19軒、土坑18基が検出された。これらは縄文時代前期末葉、中期末葉の時期のもので、中期末葉の遺構が主体をなす。遺物は縄文時代前期末～晩期のものが出土している。

遺構について

住居跡は19軒検出され、内訳は縄文時代前期末葉（大木６式期）のものが１軒（１号）、その他は中期末葉（大木10式期）のものである。土坑は出土遺物から時期の判明するものは前期末葉１基（１号）、中期末葉３基（２、４、７号）である。中期末葉の住居跡18軒について記述する。

平面形と規模

平面形は楕円形を呈するものが９軒、ついで円形８軒、隅丸方形１軒であり、ほとんどが円形を基本とする。

規模は径２m ～５m で、最小が11号住居跡の長軸２m（楕円形）、最大が13号住居跡の径5.8m（円形）である。３～3.5m の規模の小形、中形のものが多い。

炉

炉の形態は、地床炉（６号）、土器埋設炉（９、11、12、17号）、石囲土器埋設炉（15号）といわゆる複式炉からなり、複式炉は、石囲土器埋設部＋石組部＋掘り込み部＋掘り込み部[註1]で構成され、それぞ

れの組み合わせにより４タイプに分類される。

土器埋設部＋掘り込み部（４、７、13号）

土器埋設部＋掘り込み部＋掘り込み部（３、10、16号）

土器埋設部＋石組部（８、14、19号）

石囲土器埋設部＋石組部（２、５号）

９、11、12、17号住居跡の土器埋設炉の埋設土器は全て斜位に、15号住居跡の石囲土器埋設炉の土器は正位に埋設されている。

複式炉の埋設土器は２～３重に据えるものもあり、同一土器、異なる土器を使用するものがある。複式炉の石組部、掘り込み部はほとんどが底面、側面に火熱を受け、石組部を構成する石は火熱で赤変しているもので、石を抜いたものも認められる。一段浅い掘り込み部は３、10、16号住居跡に見られ、住居壁に接するもので火熱は受けていない。炉の位置は住居の中軸線上にあり、住居壁に寄って構築されるもので方向は南５軒、南西３軒、南東３軒、東４軒、北西１軒で土器埋設炉は東方向が多く、複式炉は南方向が多い。

柱　穴

柱配置がはっきりしない住居跡が多く、主柱穴を確認できたのは２、３、９、10、13号住居跡で、４～５本と考えられ、住居中軸線上にほぼ対称的に配置される。同台地上に所在するこの時期の小形住居跡の柱穴は明確でない場合が多く、住居規模と関連するものと考える。

本遺跡の住居は北側の沢に沿って構築され、切り合い関係はない。出土遺物、炉の形態、埋設土器等から縄文時代中期末の大木10式期の限定された時期の集落であり、本遺跡の南東約300m に位置する「下堤Ｅ遺跡」、南約300m に位置する「下堤Ｇ遺跡」は同時期を主体とする遺跡で、いずれも沢縁辺部に営まれた集落である。開発計画地域内の全遺跡の調査は終了していないが、集落の規模を別にして点在する11ヶ所の遺跡が縄文時代中期末に属し、この期の集落の在り方を解明する資料が整いつつあると言える。

遺物について

出土した遺物は、土器、土製品（円盤状土製品）、石器（石鏃、石錐、石匙、ヘラ状石器、掻器、削器、磨製石斧、石錘、くぼみ石、磨石、敲石、石皿）等である。以下は土器について述べてみたい。

１～３群は縄文時代前期末葉の土器である。細い粘土紐を直線・円形・鋸歯状に貼り付け、１群は平行する隆線に連続爪形文を、２群は全ての隆線に連続爪形文を施し、３群の隆線には連続爪形文を加飾しないものである。器形は深鉢形で、口縁部は直立（１点）、内湾（３点）、外反（４点）するものである。大木６式土器に比定される。

４・５群は縄文時代中期末葉の土器である。４群は本遺跡で主体をなす土器で、縄文施文後に沈線区画の磨消帯を施すものである。

磨消帯は比較的バラエティーに富み、横位方向へ展開するものが多い。器形は深鉢形が最も多く、鉢形も数点みられる。深鉢形土器の口縁部は外反するものがほとんどである。大木10式土器に比定され、比較的古い時期の坂ノ上ＡⅠ群[註2]が主体である。５群は葉脈状文を施すものである。大木10式土器に比定され、比較的新しい時期で、坂ノ上ＡⅡ群土器[註3]に類例がみられる。

６・７群は縄文時代後期初頭の土器である。２点のみの出土で、磨消手法、連鎖状文を施すものである。

８～10群は縄文時代晩期の土器である。８群の196は平行沈線を施す鉢形土器で大洞Ｃ$_2$式、９群の197は工字文を施す鉢形土器で大洞Ａ式、10群の198・199は数本の平行沈線がみられ工字文を施すと考えられ大洞Ａ式土器に比定されるものであろう。

註

註１　秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　坂ノ上Ｅ遺跡」1984

註２　秋田市教育委員会：「小阿地下堤遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書」　1976

註３　註２と同じ

参　考　文　献

秋田市教育委員会：「秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書」　1984

鹿角市教育委員会：「天戸森遺跡発掘調査報告書」　鹿角市文化財調査資料26　1984

丹羽　茂：「大木式土器」縄文文化の研究４縄文土器Ⅱ　雄山閣出版　1981

日黒吉明：「住居の炉」　縄文文化の研究８社会・文化　雄山閣出版　1982

調査区全景（南→）

調査区全景（東→）

図版 1

1 号住居跡（南→）

2 号住居跡（南→）

図版 2

3 号住居跡（南→）

4 号住居跡（南→）

図版 3

5号住居跡（東→）

6号住居跡（南→）

図版 4

7 号住居跡（南→）

8 号住居跡（南→）

図版 5

9 号住居跡（東→）

10号住居跡（南→）

図版 6

11号住居跡（南→）

12号住居跡（南→）

図版 7

13号住居跡（南→）

14号住居跡（南→）

図版 8

15号住居跡（南→）

16号住居跡（南→）

図版 9